

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十五年三月二十五日 印刷
昭和五十五年四月二日 発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六三三五号



日川協加盟

No. 635

四月号

村田瓢太著

25川柳生活『紅（へにはな）華』発刊

日時 55年6月6日（金）午後六時

会場 金属会館

南区鰻谷東之町10番地（地下鉄堺筋線「長堀橋」下車東スグー電話271・3935番）

柳話 川村好郎

題と選者

「紅」 謝選 村田瓢太

「サラリーマン」 笠原吸江

「手品」 西田柳宏子

「孫」 菊沢小松園

席題一題（当日発表・各題三句）
会費 千円（句集・記念品呈）

主催 川柳塔社

序文・川村好郎
編集・不二田一三夫

頒価 千円（送料共）
発行所 川柳塔社

つめたさに、おいしさをそえて.....

アイスクャンデー

あずき・チョコ・ミルク・パイン



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドーゾマ店
近鉄(アベノ・上六・奈良・東大阪各店)
京阪モール なんば新川店 虹のまち鹿鳴
中之島サン・ストア 淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店



大阪・なんば



TEL (641) 0551

雑 節 句

私は五月の鯉のぼりより、三月の雛人形に親近感がある。祖父母にとつて最初の男の孫だったのに自分でも不思議に思う程である。古くから家に伝わる雑壇の記憶からだろうか。昔恋しいなどと簡単に言いつくせない何ものかがある。不便で不自由ですべてに乏しかった日常生活が懐しいリズムになって湧き返って来るのである。一例をあげても九州から30時間かかって煤だらけの顔で東京駅に着いた学生時代が無性に懐しい。新幹線時代から考

えると夢のようだけれど、今の新幹線では味わえない旅情といったものがたつぷりあった。先き頃国鉄がSL試乗会に二〇〇人募集したら、一万三千人の応募者があつた由。昔懐しの心情だろうが、上には上があつて大井川を肩車で渡つていた時代から見ればSLなんか旅情の深さからみればもののかすではないと言うだろう。古川に水絶えずとの言葉があるが、古きものは尊いもの、懐しいもの故である。

暴走 族人間の屑を救急車
カラオケに音痴いよいよ見つめられ
鉄かぶと持たせやりたいスキー帽
愛情と意地とが噛み合う入学期
軸かけて旧師の筆に酒しのぶ

中 島 生 々 庵

川 柳 塔 四 月 号

座右の句

冬越してきたのに金魚さりげなく

(好郎)

私の句

辛抱の顔に見えない野の仏

北 勝美

川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

雜節句

中島生々庵 (1)

桜が咲けば

小西無鬼 (2)

誹風柳多留廿五篇研究

(二九丁)

(26)

入江 勇・清 博美・八木敬一・西原 亮・青木迷朗
紀内恒久・鈴木 黄・室山三柳・岡田 甫

川柳塔 (同人作品)

中島生々庵選 (4)

水煙抄

菊沢小松園選 (30)

柄井川柳の上をいく収月 (川柳太平記②)

東野 大八 (24)

秀句鑑賞

(同人吟)

月原 宵明 (28)

愛染帖

(水煙抄)

小野 克枝 (43)

句集「紅華」に寄せて

橘高薫風選 (40)

旅

西田柳宏子 (38)

戸田古方 (44)

桜が咲けば

小西無鬼

花便りの季節になると、何時も思い出すのが「川雑篠山支部」川柳大会に、麻生路郎先生御夫妻が、春果、栞、香林、淡舟、愛論、日満その他大勢の高弟を供に、川柳社会化の為にお越し下さったの大会になった。

草深い丹波の街に篠山支部の大会は些か潜越だったろうが決行に踏み切り、各所桜の満開の頃、四月十日と決め打合せを兼ね数度天下茶屋の路郎先生宅を訪い、総べての御指導を受けた。

花に嵐の例え、当日曇り空。国鉄バスを二台チャーター、篠山口駅まで二行をお迎え、篠警前下車の頃は小雨になっていた。此処から予定コース篠山城跡から堀周辺の桜、街周辺の桜花を楽しんで頂き、会場へのコース。

俺は日和男だから傘は不要と言われて居たが会員が都合した傘で、先跡の桜と隣雨横小中学の桜見物を終えられ下城途中の御夫婦の相合傘姿を前川左文字が甘く写したスナップ

54年度各地柳壇賞決定	若本 多久志選	(53)
第27回大萬川柳大会	不二田 一三夫	(46)
一分間の柳論	谷垣 史好	(45)
句集「夫婦」刊行記念句会	吉岡 美房	(45)
初歩教室	本田 恵二朗	(50)
大萬川柳「特別」	川村 好郎選	(52)
柳界展望	(庸佑・整理)	(58)
本社三月句会		(54)
各地柳壇(佳句地10選)	松川 杜的選	(63)
「新 顔」	西村 早苗選	(48)
一路集「スピーチ」	上田 翠光選	(48)
「良 心」	不二田 一三夫選	(49)
編集後記	(一三夫・葉子)	(67)

座右の句

悪筆はかなしきものよ白い紙

(白柳)

私の句

珍らしいことする妻の酌ぎこぼし

里 小路

写真が今もアルバムに残してある。先生の相合傘も珍しい。日和男だ傘を持たないとよく云って居られたから。案の定それから会場まで雨は上がった。徒歩で堀端の桜を見乍ら、無鬼先頭案内、春巢先生に何か話しているようだ。

途々街の家並みを見廻して、路郎先生が、矢張り変ってるね、城下街でこれだけ揃ってるのは珍しい、これを妻入住宅と云って云々と説明して下さった。途次王地山の桜を見て会場へ。句会は盛會裡に終わった。先生も選して下さった「兼題保証」である。軸吟、保証した方の背広が古かった。路郎

奇しくも拙句を天位に抜いて下さった。路郎 同情をしたら保証を頼まれた。無鬼

第二次懇親会は同町の魚市場会議室を借り盛大に終り、御夫妻は当日拙宅で一泊して貰った。

むかし歩兵連隊があつたので桜の名所が多い。前記城跡と堀周辺、王地山公園、そして聯隊内外の桜外、近隣にも桜が多く、花を楽しませる。川柳塔社篠山支部句会も毎年四月は観桜句会とし、城跡に庭の句座、手弁当の充分に桜花と、川柳を楽しむ事になっている。(飛び入りを歓迎している)



中島生々庵選

米子市 八木千代

ほとけさまに嫌われまいと櫛を持つ

会者定離海までは行く川の旅

ふと火花立てて残り火気まぐれな

血も透けて瘦せて唄えば月夜蟹

しゃぼん玉空に溶けても生き延びよ

竹原市 小島蘭幸

満一歳片目達磨も微笑めり

妻 子 俺 好きなことしている茶の間

バレンタイン存在感のない男

壁の高さよあきらめているわけでない

晩年の味方は一人あればよい

青森市 工藤甲吉

太古から還り十和田湖春の色

大寒の水六根へしみとおり

柏手をポンポン神と通じ合い

漫画なら大学生の方が知り

どうしてどうして番台の審美眼

八尾市 香川酔々

雪の底出雲神話を語り継ぎ

四苦八苦乱視のまままで生きている

隙間風信貴と生駒の間から

のら犬の勘棒切れがそこにある

賽の目が狂い出したという話

今治市 長野文庫

愛情を親馬鹿という他人さま

またお会いします会う気もなく別れ

祝辞にも順番という枠があり

折れておこ勝っても得にならぬ歳

迷路から抜けず七十年迷い

倉敷市 水粉千翁

つつがなく入歯の音がする笑い

腕撫でて人生かくも節くれる
肘枕本来無一物の顔

野仏を撫でて行末など語る
娘の晴着父は爪先ばかり見る

大阪市 河野君子

ウインドー透かせば毛皮の総毛だち

夫とは別な想いで髪染める

軽い命へ盛る錠剤のあざやかな

朱の鳥居いくつ潜れば許される

春の海亡母が遠くで琴を弾く

今治市 月原宵明

青春もロマンも深い皺となる

万両の朱へ喝采をおくる雪

球根の力に負けた寒の土

誘惑に勝った夕餉の無味を噛む

目薬をさせば闘志の湧く若さ

富田林市 岩田美代

うしろ指寒い話にしてしまう

ともだちも不器用に生きたと笑い合

はなれて住む血を信じてる冬の底

ふり向くまい失いしもの大きすぎ

最高の痛快かすのこの倒産

大阪市 小出智子

両の耳閉せば春の音がする

女と妻のあいだで好きな彩を着る

もらい泣き愚かな母性愛である
冬の夜のびしびしと鳴る鞭の音
大根をこしこし洗う人嫌い

八尾市 高橋夕花

中年の夫婦にもくる春嵐

堪えかねて二月の花に水をやる

姉老いて亡母の姿になってくる

明日は立春 心は一枚脱いである
せいたくな一日 部屋にバラの束

倉敷市 野田素身郎

頼もしくもあるが息子の飲みっぷり

飾りようがないから生地そのままで生き

庭もないのに立ち止まる植木市

草餅が好きな老母へ春寒し

通夜の席で約束を思い出し

堺市 高橋千乃子

心冷える梅のつぼみもまだ固し

証拠掴もうと嫉妬が尾行する

女六十最早くずれたシルエツト

親の鍵合わない娘の玉手箱

ぬるま湯をあげたい寒の植木鉢

鳥取市 両川洋々

幸運のパズルへきれいな嘘が棲む

みね打ちの愛は急所をみな外れ

前歴を伏せて出直す画布白

口答えさせても見たい棺を閉ず
逃げ道がないから男肚を据え

高槻市 若柳潮花

護摩木たく煙が寺の屋根を越え
廻れ右出来る男の憎い足
死ぬる氣の恋に相性なぞ言わぬ
どっちゃみち貝になるなら桜貝

新歌舞伎座にて

慶びを鏡三番で舞い納め

尼崎市 黒川紫香

残り葉が新芽見ながら散り落ちる
銀婚の手をとり合つて古都の春
色街で育つたと云う糸切齒
奔流にもまれて落葉艶を出す
冬鳥が湖面の雲を崩しに来

岸和田市 高橋操子

国寶並にホアンホアンのお嫁入り
こたつから積つてほしい雪をほめ
譲る子もないのにあれこれ金もうけ
関白宣言出来る男になつてほし
床の花活け替え孫の試験すむ

米子市 林瑞枝

主婦連の切れ味見せて居る質疑
陽だまりへ北風受けた子が息い
教の子も中年貫禄ある出逢い

二度とないあの頃追うて白髪抜く
資産家のけちな暮らしにある倫理

島根県 堀江芳子

雪解けたならと雪国約束し
ふたりいて歌う夫へアンコール
ほつとして脱ぐ白足袋も疲れてる
荷を作る仕合せいっぱい手にあまり
亡父の癖懐かしやがてめぐる忌よ

島根県 堀江正朗

ぶつかつて曲る目のない僕と風
炬燵という味方もあつて年楽し
雑草の枯れば枯れて語りかけ
くる春へ負けぬ力を食べておく
噛み砕く力まだまだ鬼の豆

島根県 林露杖

葉牡丹の茎立ち春の方に向き
産声のたしかさこれが孫の声
妻の眼に酒あきらめる硬化症
この絆緩めて欲しいときもあり
説得と云う暴力に屈するか

島根県 榊原秀子

国賊と思う人あり血がさわぐ
春場所が終りたのしみ一つ消え
薄氷の池へ緋鯉は低姿勢
折角の電話を切らず客がくる

極限に張った輪ゴムの身を案じ

大阪市

中川 滋 雀

和歌山市

浦野 和子

一日の重さを悔いのない疲れ

蓮根の穴にもそれぞれ顔があり

ふる雪のしじま童話の夜になる

あてにした地図に余生が書いてない

入れ替えたお茶から過去を喋り出す

川西市

戸田 古 方

和歌山市

西山 幸

どんな顔したらほんとうの僕の顔

メモ通りことが運んだとしましても

おろし金にうまく馴染んでみち溢れ

上手に積めました孫の摩天楼

事事如意の笑いとこれをいうのかな

和歌山市

野村 太茂津

岸和田市

古野 ひで

恩給では食べぬと闇へ国を売る

売国奴も生きる一分の理屈持ち

世が世ならとは老兵の口癖か

胡座組みほぐして舌鋒かわされる

裏話楽しく老兵の目が潤み

岡山県

嘉 数 千代香

竹原市

山内 静水

節くれた掌に悔いはなし古稀の春

義理欠いだうしろめたさも生活の譜

おとこなら紛らす酒もある疲れ

馬鹿でとおす姑 この辺で姑のかお

ご無沙汰の悔いを抱いて訃へ急ぐ

地に烙印押しして椿は悪びれず
木々芽吹く微かな春の布擦れに
これしきを喜び給う母も歳
耳よりな話にからくり潜ませる
方円に従う水にもある迷い
戦記まだ終わりにならぬ日々を生き
姫鏡見飽きた暗い顔がある
花だより生者必減くりかえす
日記帳ひとりの冬が動かない
ぬるま湯のなかで無策を焦りだす
ふと貝になってみたいと思う日も
機転きく嫁へ素直に感謝する
同窓会恩師も踊る炭坑節
よくうつる鏡へ心は化かせない
懸命に堪えて新芽春を待ち
指切りもせんなし孫に取り巻かれ
約束ごとですとは他人の言うせりふ
極悪人だけは解った御法り聴く
小細工はいらない美しい涙
一筋に生きて未完のままです

倉敷市

小幡 里風

野に山に伝統があり四季の花
一石の波紋へ騒ぐ向う岸
対決へ妻が油を差してくれ
あのひとに逢える無駄足ならば踏む
男なら哭くなど父に光るもの

宝塚市

傍島静馬

女房に病まれて関白しまらない
遺言状書くうち死ぬのがいやになり
世間体があるので塾へ通わせる
仲裁が和解ムードをこじらせる
本音探るつもりが先に酔いつぶれ

守口市

羽原静歩

古新聞売っても売ってもついて来る
天平の春 おおらかに明けてくる
腐るほど持って世継ぎのない哀れ
病いは気からと今日を張りきって
糸屑も落さぬ母の躰かな

神戸市

仲 どんたく

お化粧中のぞいてえらいおこられる
こいさんの頃の話や孫のこと
色も香も見果てぬままに古稀に入り
電話口傍に黒子が居る気配
嫁はん大じにしいやと新やもめ

西宮市

島居白宗

当てにせぬ暦の運勢期待もし

三三忌また甦える亡母の愚痴
ご先祖を祭れば肩が軽くなり
忌に集いこれが最後かと皆んな老い
腕相撲勝ったが後で痛む老い

倉敷市

稲田豊作

灰色の余命へ孫が虹を描く
宵寝して深夜目が覚め朝寝して
朝の眼鏡で三面記事は見たくない
笑える時笑っておこう大笑い
さあさあの持てなし胃の腑悲鳴あげ

堺市

藤井一二三

北風が生きる辛さの皺を彫り
慰めの効かぬ不幸は医者が病み
春はもうそこだと梅に励まされ
待ち切れぬ春一輪の梅が咲き
春の陽がほのぼの梅へ語りかけ

新宮市

大矢十郎

青年の壮志をくじくマイホーム
手付金置きそうだったにそれつきり
夫唱婦唱重なる婚期入学期
引抜いた白髪を獲物のように見る
順番で逝くまで敵を作るまい

松江市

小林孤呂二

陳情は怒りの瞳でなく落着けり
酔うて書く文字が生きている不思議

耐えきつた内助の功は口伝え
羨ましいかぎり真つすぐに杉木立
人間の跳ねあがる手には矛がある。

島根県

錦 織 文 子

すきとおるガラスよ秘密のない個性
あきらめへ忘却という字を探す
もう二月、足音のない速度です
しんしんと雪の呼吸を聞いて眠る

叙勲などない主婦業の四十年

伊丹市

榎 谷 寿 馬

たこ焼に政治突き刺す妻揚子
お隣の喧嘩の影絵サツシ窓

すき焼もうなぎも通り抜け家路
不意の客用の羊羹待ち切れず
受験の日まつ赤な丸を塗る暦

笠岡市

松 本 忠 三

すがりつく袖聞きおくと言うただけ
酔い醒めの水けつまずく枕元
欠点を笑い合えるも老夫婦

二、三行読んで分つた顔をする

こじらせた風邪は課長が呉れたもの

奈良市

森 田 カズエ

お役所へゆく日判コを確める
諦めていても雲行き気にかかり
みち足りた笑顔は母にくれてやろ

年輪をみせて素直な躰けかた
風化する民話脚色したくなり

大阪市

本 多 柳 志

着飾って出て七人の敵に会い
女にもいくさがあった花名刺
旧姓で呼ばれて旧い血が騒ぎ
カラオケの軍歌へ酔うて明治です
当分は七十で行く定期券

大阪市

金 井 文 秋

体調のよい日は齢のこと忘れ
灸すえなはれと嫌なことを云う
欠席にして言訳も添えておく
ど忘れとぼけとで絶えぬ口喧嘩
買い溜めも出来ぬ電気とガス騰る

笠岡市

木 山 遠 二

まめなのを不思議がりもし老夫婦
八十年嗚呼寝ては起き寝ては起き
続く者途切れとぎれとなる八十路
大物を狙う桂馬の藪睨み
断りもなく癌が巣くつて居たと知れ

島根県

藤 井 明 朗

雪の下ふる里遠い春を抱く
仕事遅々寒さに負けるのも歳か
梅咲いて客間はひとを待つ香り
北風に耐える古木も春を待つ

値上げ攻勢自衛はかなし台所

宇部市 平田実男

角出して見たい日もあるお月様

大阪市 神夏磯道子

ハイハイと言うてことわる術にたけ

豆で逃げる鬼ならベツトにして見たい

資源ない国とは見えぬゴミの山

かすがいになった子がいて老人ホーム

鳥取市 河村日満

返済に声まで角がたつ焦り

何はなくとも湯豆腐がありわが家の灯

泣き声を聞かぬ日はなし孫二人

さんづけで呼ぶ先生の髭の艶

性格がそのまま句主が浮かぶ句碑

倉吉市 奥谷弘朗

有る者が太れるように世が動き

人間が良心だけで生きれたら

ちよっぴりと皮肉きかせて釘をさし

石橋を叩く気でいて又転び

口実を庇うてやればなおこじれ

藤井寺市 児島与呂志

うまが合う恩師に屋台へ連れ込まれ

失策を庇う上司の挫折感

暁を裏切る冬のまるい月

闇になる雪まるうのせ道祖神

才女ぶる足音だんだん強くなる

頂点から落ちたと思わないことにする
樟脳と離れて見たいしつけ糸

鳥かごの広さの自由しか知らず

セツトした日はちらちら見る鏡

食養生夫婦の絆強くなる

岸和田市 狭間希久志

良心が遠のいている隙つかれ

弱虫も妹庇って一步出る

苛立へ孫の笑顔が水をさす

童心にかえりまっすぐボール追う

遺言の墓へ供する琴の爪

大阪市 那須鎮彦

地平線どこまで続く蟻の汗

すこやかな心で磨く古機械

一ト筋に生きるやすらぎだつてある

寝化粧を妻堂々と三面鏡

水溜りの月をとび越す軽い下駄

岸和田市 島崎富志子

甘い親そんな言葉に甘んじる

靴下を繕う手元を不思議がり

久々の雪の感触子に帰る

生活のリズム ベツトが崩しに来

ひまだから思いたくない過去思

八尾市 宮西弥生

面白く生きようそんなお別れだつてある
マンネリになるから女から蒸発

よくしゃべる女を見ている煙草の輪
別々に住んで絆を深くする

一月九日亡母七回忌

今日の日母の重さなおさらに

八尾市 高杉 鬼遊

騙されよう善人の知恵ひとつ

樹の影を笑えば影に笑われる

野良犬の勘にさわつた残り飯

表情をどこへ忘れた定期券

寒椿ぼとり誰かの計が届く

大阪市 大坂 形水

老画家の猥談朝をさわやかに

はにかみの片面見せる顕示欲

スピーチ役済んだとたんに食べとなる

取られても知れてる税ヘノイローゼ

ワンマンの「愚妻 愚妻」を聴き慣れる

大阪市 不二田 一三夫

大國のパワー・ゲームに巻き込まれ

二たことめには広辞苑広辞苑

稿料は安いが1号活字のペン・ネーム

巻きずしを丸かぶりする歯だけ持ち

手のひらへ待ち合い場所を書いて見せ

泉佐野市 阿 萬 萬 的

変らんなあの連発どちらもお人好し
冬が足踏み石段の隅の雪

小京都角を曲がれば梅匂う

蠟人形に似ていて恋を知らない娘

松原市 谷 垣 史 好

北辺の守り気になる雑祭り

切り口の沓えが鈍って五十五に

ガラクタもわが家の歴史捨てられぬ

背が寒い何かやましいことがある

東大阪市 市 場 没 食 子

風媒もあり虫媒もあり春だもの

苦手でも先にお悔み言う立場

病人より看護疲れが先に逝き

愛論氏へ

何やかや君には老いて未だ頼り

岡山市 川 端 柳 子

居心地の苦楽それぞれベット老ゆ

いろいろで省略お世話に成るばかり

うるさ型尚も親切売りにくる

太陽を呼び寄せている子の笑い

桜井市 岩 本 雀 踊 子

待ち呆けこの頃流行る風邪をひき

やれやれと云うやすらぎを持つ老婆

負けず嫌いの女の財布軽くなる

悪運の強さを少し憎まれる

大阪市 山川阿茶

舞台では弟子に三つ指つかされる
すぐわかる義理で来ている献血者

店頭のさくら一と足先きに咲く
仕事もち傘寿は傘寿の薄化粧

倉敷市 藤井春日

三味の境地が残した鑿の跡
めぐり合い過去を許して歩む道

根分けして差上げた方が美を誇り
虫のいい願いに神も一思案

大阪市 太田良子

巻きぐせの残る一月のカレンダー
三面鏡振袖の娘がはしやぎおり

陽のぬくみ残る蒲団へ心満つ
一病息災その一病が重過ぎて

兵庫県 大江秋月

雑踏をかき分けて行く初詣で
錦絵の美女にそばかす見当らず

吊り鐘を孫と一緒についでみる
経理課に会社の知らぬ金が必要

出雲市 原独仙

松竹梅裸木のうめひそと添い
新築の柱は釘と妥協せず

心よく追加値上げに触れず酌ぐ
地球自転出雲はシベリヤ風もろに

京都市 松川杜的

赤信号待つ間車の数を読む
ドラマでの病氣もガンが大はやり

菜の花を活けて二月の部屋にする
三十六峰一山ずつを読む日課

寝屋川市 宮尾あいき

外は雨鏡の顔は晴れ晴れと
朝鏡お婆さんと呼ぶ顔でなし

老人会の誘いに乗らぬ気の若さ
記念写真バックの富士はいつも晴れ

下関市 国弘半休門

寒中に笛を掘る無理も聴き
渋滞のこの先ねずみ取りが待つ

善は急げ悪へも急げ係官
ひな壇に席をとられて孫と寝る

鳥取市 佐々木静泉

ご無沙汰をうめる活字が見当らず
野仏へ情用捨なく吹雪く

省エネ対策バイクにかえて風邪をひき
子へ過去を話し俵せ蒔かんとす

羽曳野市 榎本吐来

人並に齡重ねて五十肩
五十肩亡父の知らない年齢迎う

恍惚を彼岸のことと思われず
入試失敗親父としての言葉撰る

大阪府 西川善紫

やつて見せると云う意欲に逆らえず
言い方もあろうに言葉に角が立つ
口とは反対妥協の機を狙う
後は知らん顔蜂の巣をつ突く

玉野市 小谷仙山

言う人が言わねば言葉生きてこず

どの道も三途の川で行き止り

転ぶだけ転んでどん栗根を下ろし

年金が他人の目には多すぎて

鳥取県 森田布堂

負け将棋逃げたと見せた罠に落ち

信念に生きれば頑固だと言われ

税務署も見えて城趾の花の宴

言うべきか言わざるべきか遺書となし

東大阪府 竹中綾女

亡夫の夢醒めずにおくれと又眠る

友達の土産は先ず亡夫へ供えてから

不足言えは切りない一人暮しです

風邪ごもり節分立春すんじまい

奈良県 村上春巳

サイクルを変えてみたいと想う日も

草よ木よ新居の春を萌えてくれ

二日酔い飲める元気がまだあつて

兄弟でマイク取り合い五十坂

松江市 恒松町紅

天中殺北風やっぱり身にしみる
職人氣質すたれ背広がほころびる
初老まだまだ北風にたち向う
他人事でない記事を読む手がふるえ

大阪府 河井庸佑

計略にはまる計略とは読めず

無意識に目覚し二つとも止める

雨あがり古都の緑が映えて見え

花便り若さがじつとさせとくかず

平田市 久家代仕男

昼の風呂豚舎の父を呼びにやり

飲み友を雪見に誘う妻の留守

綺麗ごとだけでは食えぬ団地の灯

土となる轍の中の落椿

枚方市 宮川珠笑

大手術控え見舞いを笑わせる

専用の椅子がないまま勤め終え

定退の席に冬日が当りすぎ

湯気立てて賀状を配るアルバイト

諫早市 原田明春

値上りをボヤクばかりで策がなし

発熱を気づかう女房の手の温さ

保険屋に老後のことも指図され
嫌いでも好きでもない嫁きそびれ

春の絵にリニアモーターカーが翔び
企みを秘めて蕾が開きかけ
雪国で育ち不孝な爪が伸び
受験の灯消えて来年期待する

呉市 林野 甦光
松江市 梅本 登美他

老いの汗ここに実った山畑
なれそめをそっとこけしに語りかけ
ふと翔んで見たい気にする美容院
三つ指をつけて教わる茶の心

大阪市 川口 弘生

退いた一步に活があつた死地
寒風に勸の悪そな辻易者
例えばの話で要求外らされる
話の腰 上手に折って話下手

羽曳野市 塩満 敏

津軽三味雪のこわさを知っている
よちよちの孫は鳩にもからかわれ
手鍋下げ孫も出来たぞうさぎ小屋
バスポートないが今年も渡り鳥

島根県 梅みどり

甘酒をすする雨戸へ吹雪く音
振り向いて一言優しい娘の笑顔
初恋の日記読みつつ香をたく
諸諸の願いに迷う数珠握る

運勢は真黒暦買い直し
夢の無い男ホテルで酔うて寝る
その人の指紋大事に仕舞うとく
幸運に変な所でめぐり合い

姫路市 植村 客遊子
西宮市 藤村 女

惜春の筆をふと置く風の彩
うず高く積む膳静かにくる宿坊
すきのない人と話してくだびれる
春有情孤独のからを持って余し

兵庫県 河原 みのる

トップ ビリのほかはマラソンほっとかれ
雪しんしん檜山節へおもうこと
深川を踊って足を試さんか
タイミングテレビのように死ねたらな

和歌山市 内芝 としよ

折り言なくても自然に合う十指
ふつくらと椿のつぼみ誰を待つ
部分品狂るても芯棒まだ確か
思い出がだんだん優しい夫にする

島根県 小砂 白汀

気の重い日にも雀は鳴いてくれ
そのときは巨象のごとく倒れたし
サイコロを確かめもせず投げる
撲たれても叩かれても笑顔くずされぬ

定退近く働き蜂の足が萎え

呉市 横田 英詩

寝汗一斗禁酒いつから始めよう

人愛す投資にレモンティー二つ

おみくじの嘘つき縁がまだ遠く

米子市 小西 雄々

メンバーの掟をみだすフェミニスト

病状を深く聞かぬも礼のうち

医者かえてみても同じことを言う

舌打ちをして算盤を入れなおし

大阪市 本間 満津子

春の色着て見て靴を磨いとく

命ある哀しさ老い呆けとは知らず

四月馬鹿かとは思えど良い話

気を張って書けば手紙がしらじらし

鳥取市 有田 とし江

清水寺参詣

石段を踏む子に亡夫を見る想い

足立美術館にて

大観の富士が安来でそびえ立ち

出雲そば母子の旅を温める

雪止んで親子の旅の空晴れる

和泉市 西岡 洛醉

遠慮ない歩幅へ土の澄んだ音

極楽と隣合せて居たい朝

求めても死に場所まだまだ遠いとこ
かさかさの指に男の判があり

和歌山市 津田 与史

高齢社会ここも過密の住みにくさ

寒がりでんナと草の芽に云われ

同じこと繰返しつつ恙がなし

毎朝の鏡ゆがんだ顔つづく

東大阪市 斎藤 三十四

マヒの兎の豆は鬼まで届かない

明日からは来ない机をなでて去に

アルバムの軍曹殿が爺チャンか

二次会で幹事は酒量發揮する

大阪市 天正 千梢

失敗を栄養分に還元し

涙ふいてやるハンカチ持ち合わせ

地下足袋がいつち孝行してくれる

忠孝の消えて久しき世となりぬ

姫路市 大原 葉香

貧乏症明日の財布を確める

神主の杵は神代の音で鳴り

何もかも知ってて星は語らない

玉手箱いつ開けよかと持ちあぐみ

守口市 野呂 右近

亡母の歳迄はと妻にも夢があり

愚痴を消す火消壺なら一つ欲し

成就した刹那に消える夢ばかり
ため息をつくのは受話器置いてから

竹原市 時 広 一 路

瀬戸うらら渚に貝が詩う春
地下街の川に目高が泳げない
被写体としか山門見てくれず
愛情の一つ剪定の思い切り

倉敷市 田 垣 方 大

鼻すじがただ者でない裏通り
櫓も櫓も手を休ませた春の岸
ふるえてはおれぬ男の丸木橋
春の風背筋をしゃんとさせて過ぎ

柳井市 弘 津 柳 慶

二男結婚

けなすのもいて盛り上る披露宴
新婚の当分明白許しとき
新世帯もう尻に敷かれかけ
照れている二人へ派手なお見送り

島根県 大 森 孝 華

酔うてからしみじみ和解のことに触れ
掘りごたつおときの窓へ雪を降る
さりげなく合槌打って打診され
地に返る姿へ舞ってぼたん雪

大阪市 江 城 修 史

生きる嘘いつか素顔を置き忘れ

返り花何を思うて咲くのやら
金策へ夕陽ようしやなく落ちる
冬服の重さにたしかな老いを知る

和歌山市 若 宮 武 雄

極楽橋ながい高野の坂の果て
ことし古希鼻毛も白くなりまして
子に負けてむつつり顔の酔い心地
その時の風の枯葉になりきれず

兵庫県 遠 山 可 住

城を出た女 女になっている
良い服を着たらしくじる性を持ち
もう誰も構ってくれず風邪治り
同い年やないかへこへこして居れず

岡山市 直 原 七 面 山

謎秘めし埴輪の目
振り向けば女が目
金出来て死を恐れ
漕ぎ出せば向かい風

鳥取県 川 崎 秋 女

子を産まぬ女が描く未来の囀
五十年の空白うまつたクラス会
雑草で終る私に悔のない
海猫のなまめく声に春がくる

大阪市 欄 蘭

暖房がきいてゴキブリ浮かれ出し

欺すより欺されて見て安堵する
呪み鯛家族の視線をもて余まし
せめてもの福の神にすがりたし

出雲市

高橋 可保留

狸寝は程よい頃を待つて居る
趣味として読む運勢は面白し
玉砂利と福豆ごっちゃんに踏みつぶし
負けぬ気の父大声の鬼やらい

鳥取県

金川 満春

社の金庫赤字経営語らない
内職が今日千円を嬉しがり
火種まだ尽きぬ気力の坂のぼる
次々に豪華な家が建つ不思議

橋本市

森脇 善太

つぎはぎでこなす一日だつてある
背信の裁きは天に預けとく
のびのびと土筆地価など気にしない
一線を引けば悪人ともいえぬ

松江市

柳楽 鶴丸

堪える事になれてしまった日本人
サイコロの七を一生追い続け
無口な男が又煙草に火をつける
政治屋のソロバンは二二んが四十

松原市

北野 久子

倅せな日があきつと来る重い舵

舶来の売場で夫横を向く
ポックリ死あれが別れに來たのやら
身に覚えあつて押売り買うてやり

竹原市

古谷 節夫

東風吹いて雑草も歌う春の詩
十年余片目タルマが居座つて
八つ当たり小石もそっぽ向く構え
自画像へ消えない皺が一つ増え

岸和田市

福浦 勝晴

路地裏の奥にひっそりシクラメン
ツリ銭を読んで懐ろ見透かされ
新築の床に重たい冬の薔薇
おでん屋の肴にされた自民党

大阪市

藤田 頂留子

サイレンに元栓気にする市場かご
悪い方の勘は不思議な程当り
ローソクがゆらいで大師語られる
霜柱もう其の下で春仕度

豊中市

安藤 寿美子

診断はお年齢ですねと終りなり
もう一人乗せぬと出せぬ観光船
ハイエナにたかられている退職金
退職金遊ば遊ばと言う女房

藤井寺市

中原 比呂志

オクターブ上がらぬ今日は連休日

パジャマ着てふと宿題を思い出し
目頭の熱きを拳堰止める

ジョギングに抵抗しめすふくらはぎ

東大阪市

崎山美子

ウインクしたままでだるまは忘れられ

二代目と言う温室であぐらかく

運のない男はだるまを真似てたえ

二代目の医は仁術をわすれさり

ホノルル市

前山北海

ドル安に訪日ブラン食い違い

高見山星を残してほっとさせ

タラップで旨いハワイの空気褒め

背伸び日本伸び切り米に追われ出し

松山市

竹内寿美

泣くには少し明るい台所

胸底をのぞく吹雪で眠られず

雪の下どこ迄深い母の井戸

雪晴れて水鳥御前も嬉しいか

松江市

中川晃男

父と子の酒がうれしい母の酌

昔々の嘶に孫が理屈言う

孫が芸を仕込まれてくる里帰り

言い分はそれだけかいとイナされる

東広島市 高橋 鬼 焼

アパートのくらしになれた人形で

あくせくと働く父の詩が好き

少年の夢を育てたランドセル

未来図の中で義足の音を聞く

神戸市

中村 ゆきをを

いつまでも童子でおれぬ知恵おくれ

なにごとく受身の父の背中押す

受身していると敵のつぶてがすぐわかり

ぐっすりと眠りたいので嘘つけず

鳥取県

鈴木 村 諷子

蟻の道怠けごころを叱るよう

星屑の地球に住めるひと粒か

さざんかの散ってはみたが雪の上

寝屋川市

柴田 英壬子

ピリオドをうつ気の人と来た浜辺

たなぼたでない倅せを噛みしめる

摩耶山の夜景へ言葉が乏しすぎ

大阪市

西森 花村

アドバルーン失言でしたとすましてる

春の雪相合傘に日が当り

春の雪そつとしておこ君が髪

堺市

伏見 茂美

嫁がしてさびしきものよ一人言

一人言声の高さにちとあわて

気楽なと思えど近所の壁厚く

兵庫県

北山越山

雑念へ写経遅々とはかどらず

和歌山市

福本英子

定年の詩に線路の音がのる

キナ臭い事も伝えて渡り鳥

捨てられて吠え過ぎだったなと悟り

東大阪府

本多清人

音たてて落ちる椿のいさぎよし

大阪市

北勝美

春よ来い孫と待つてる三輪車

男酒女おしやれにロマン秘め

神仏にふとふれる日の淋しさよ

今治市

越智一水

大吉も怖いしおみくじやめておく

岡山市

時末一灯

かしわ手の音杉を縫い杉を縫い

湯の山温泉

子のように妻が喜ぶ雪の宿

御在所岳

お土産へ指折る妻がいじらしい

岡山県

出原敬一

五線譜は冬のまんまのお水取り

竹原市

森井菁居

心にゆとり確かめ敵のベルを押す

もてあます地価は墓地ともつれ合い

陽当りの畔から春がしゃべりだす

大阪市

横地雅風

寒行もやはり生身か風邪をひき

美祿市

安平次弘道

お彼岸の安堵が突かれた春の雪

和歌山市

桑原道夫

祭りの音を背なにしばらく屈み込む
気の早い夕方にする街灯よ
やたら巧くなる少年の死んだ真似

羽中市 三宅ろ亭

露のとうそだけ雪を遠慮させ

金貯めた落第生が上座占め

古時計に負けまいボクと同じ歳

寝屋川市 江口度

解答せまる横でカセット回リだす

政治家の寒い話を聞きあきる

家出した男女峠まで駆ける

京都市 都倉求芽

幸せを買いとる気でお賽銭

ひと昔前の陰口聞く酒席

二次会へ主流派が一人きた誤算

大阪市 神谷凡九郎

足組んだ女に少し試される

二本目の煙草をつけた女の瞳

足組んだ女の視線追うてみる

貝塚市 行天千代

バスの話 話題路・玉ねぎの出来具合

美しく舞いつつ雪は積もりゆく
みそ汁がさわやかな朝つれて来る

鳥取市 小林由多香
痛みまだとれず医者若さに腹が立つ

成人式やっとな心も大人びる

思うつばそろそろのぼせて来た口調

岡山市 井上柳五郎

通過するまで枕木耐えきしむ

雑魚だから見得なく二度の職きまり

欺まされて思い違いかとも思ひ

大阪市 室谷徹舟

祈るよに孫の初声耳立てる

万物に感謝をしたい男の子

嬉しくて妻も酒をくれと云う

大阪市 神田秀峰

三寒と四温へ花も身構える

殺人が多いに水子は供養され

入浴へ瘦身湯舟の隅で入り

米子市 石垣花子

線少しはみ出し打たれる杭となり

左遷地の人情にふれ立直り

立春へ枝先大地の暖みため

大阪市 津守柳伸

渦になる噂を好む黒い霧

ジーパンに毛皮着こなすティーンエイジャー

月よりの使者に逢えそなおほろ月

河内長野市

井上喜醉

十円で話せる親へもご無沙汰し

池の底もみじの落葉生き残り

暗い道音痴な軍歌で通り抜け

島根県

飯塚虎秋

道のりは父の歩いた遠さなり

海鳴りは去り逝く妻の喘ぎかも

骨抜きにされて文化にしがみつ

岸和田市

清野こう

寒風に水仙凜とたじろがず

柳友と来て又愉し雨の宇治

暇々に縫うて生れる日に備え

島根県

西村早苗

やがてやがてゴールに近い毛糸の目

女は哀れ恋を火薬に近づける

酒の酔いかりて消したいものがあり

西宮市

若林草右

手のたらぬ病院の雑煮焼けていず

病室へ半分冷えた雑煮餅

詰む方へつむ方へとへボは逃げ

橿原市

岩井本蔭棒

神無情善男善女の橋が落ち

寒い朝二度の勤めへ背を押され
討首も獄門もない世の乱れ

倉敷市

斎藤通風

精力をつけよが哀れ亀の首

終生の働蜂が教訓か

足がある手がある石油無きしころ

鳥取県

清水一保

人間に肩書き猿族笑

冬の雨言葉となつて問いかける

人類の倫理力が決め左右

鳥取市

岸本無人

曲独楽を信じきつてる三味の音

草の芽を抱いて枯草朽ちていき

愛想のいいのが釣竿割り込ませ

東大阪市

萩尾真佐志

六十の赤人は人俺は俺

支払いも済んだ頃やろ出るトイレ

何事の無さも愚痴って罰当り

島根県

大野酔夢

家計簿の陰に父の座そつと在り

底のない桶にセツセと注ぐ善意

一握の土も可愛い如露の水

米子市

増田竹馬

元日の雑煮をはばむ晦日蕎麦
逢うた夢朝の枕が少し濡れ
人肌に温め残業の夫を待ち

兵庫県 藤後実男

チップとる女二つの顔をもち
台本になかったセリフで客にうけ
時間割女房にはない共稼ぎ

和歌山市 坂口公子

単色の私へ鏡ばやいてる
飛行機が忍びの顔で星座ゆく
のぞいても見えない猿の知恵袋

唐津市 新岡回天子

盆栽の百年を経て生きる土
役についた妻へあとおし役が来る
零下十余度続々つれるのがたのし

京都市 山本規不風

北風に背を丸めてはおれぬ父
六法の妻の権利が上がり出し
卑怯者になっていたのは父の嘘

和歌山市 松原寿子

生と死へ致死量だいてるいのち
薄氷を踏む日の靴が春を呼ぶ
春そこに巢立ちの笛が冴えてくる

三重県 坪田冬花

散髪をして背広着て靴をはく

信じてはくれぬが心まで売らぬ
迷信を母は気にする落ち椿

仙台市 川村映輝

お目出度う孫に誕生日教えられ
おしゃべりのお悔み一言多すぎる
年金のくらしになって柴になり

岡山市 花田たけ志

グリーン車のしじまを破る雪の富士
前歴を入れた名刺にとげがある

青森市 五十嵐操史

納得のできない寄付へ茶をすすめ
誤解されやすい態度がなおらない

米子市 佐伯越子

寒椿つきぬ想いを地に積みて
踏み越えて踏み越えて行く愛もある
（八木千代さんに）

熊野市 西久保苔石

デパートを軽い財布で見て回り
同じ水飲んで夫婦の今日の緑

岡山県 岩道博友

奥の手がもう出かかると酒を酌ぎ
日記帳少し細工の文を書き

伊藤茶仏

アメリカの突かい棒にのめる国
水仙の叢生越前蟹を売る

ぶきつちよを頭ごなしに叱る父

薪割りのコツを教わる汗を拭き
てのひらに書けばうすれる願ひごと

見渡せばわが家はエネルギーばかり
両の手にいっぱい春さし上げる
田の畦の春を掴んで投げてみる
夢に出たかけがえのない句を逃し
寿命まで生きてやるとはよい覚悟

振り過ぎて破れてしもた旗じるし
なまくらで切つてはみたが血を吹かず
枯木がにぎわい過ぎて困るなり
社交家の流石アドリア堂に入り
一日に三つの顔を使い分け

女の機軸うれしい嘘で逃げ
なるようになるさ梓の外にいる
金婚やでそうなりますかと妻
明日があるさ老い執着か
毒舌の中の愛情うれしくて

風と雪南天紅い目をむいて
煙草の輪雪の子報に逆らわず
告発と疑惑は我が家にもあるな
相談も次元の違う嫁が居て

浜田 久米雄

本田 恵二郎

川村 好郎

尼 緑之助

跳ねたとて五億に遠い小魚で

長迷の凡愚卒寿へ生きる欲
孫受験爺も立ったりすわつたり
老妻病めど味噌汁ぐらいまでは出来
心通じ合えぬいらだち歳の差か
親殺し心も冷える八十年

殺す間が無いのでそのまま埋められ
三代に仕え暇とる足が遠ざかる
真すぐに歩けば風も従いてくる
承知した時の涙を咎められ
坪百万ぺんぺん草の知らぬこと

言つて了えば思い出が消えそうで
梅散つて地にかえる音気付かせず
深追いをするなど梅が散りかかる
山という概念 三角を白く塗る
足袋ぬいて疲れをドツとためている

湯豆腐を掬う夫婦を軽く妬く
ええ勤やったなアと男のさしむかい
太い方を握られている善後策
四苦八苦男は晩成信じてる
泉史郎の声さえ返る春の闇

若本 多久志

菊 沢 小松園

正 本 水 客

西 尾 栞

川柳 太平記 (23)

柄井川柳の上をいく収月

東 野 大 八

柄井川柳が登場するまでの呼称は単なる前句付または江戸句であった。柳多留の母胎が万句合で、明和期つまり柄井川柳が正式な点者で売り出した頃は、万句合アームもピークの頃で、年間約十二万句が集り、勝句はその約四十分の一、つまり百句に三句見当が万句合の摺ものに登場していたわけだ。

柳多留八篇までが完全な万句合勝句から出来上っているが、選者の川柳も、編者の可も板元の花久も若かった。前句付の一点者の表徳(柳号)が、川柳なる短詩型の呼称として後世まで残った陰の手柄は、このトリオの働きに起因したことはない。

だが、万句合の投句は何も柄井川柳という一点者にのみ集中したのではない。二十名を

越す各派の各点者も万句合を手がけ、数多の会所本を出していた。勝句には懸賞金がかかる射倅心がいわばアームを呼んだのだから、各点者それぞれに出版を試みていたわけだ。

京、大坂渡りの前句付が、約十年後に江戸で成熟した時点では、これらの前句付は俗称江戸句で通っていた。享保年間に出た「江戸句板行目録」が、その点者板行番付を形成しており、元禄十五年刊の「あかえぼし」は江戸句と称し、江戸句万句合勝句一枚刷を出している。その頃川柳は出生していない。

上方から江戸にきた前句付は、江戸句と称されていたが、点者も貞門や談林系列で、江戸句は江戸座からきた呼名かもしれない。だが投句する側は、大衆で俳諧がなんのこや

らとにかく景物取りが目標だから、投句も手当り次第、雑乱無章の形態で、ところかまわず投句し、他人のものやら自分のものやら見境いもつかず、前句付、江戸句の分別もなかったでたらめぶりであったことが察せられる。宝永元年刊の「江戸すゞめ」によると蝶々子、竹丈、紫川、円水の名がみえ、その右翼の点者には調和・不角がいた。少年期の柄井川柳が接触したのが不角であることは述べた。芭蕉を頂点とする俳諧の道は、時の移り変りと時代環境の変化によって、いつか娯楽逸氏の万句合興行が発生すると、当然アームに便乗した身すぎせすきの判者点者の輩出となる。

柄井川柳が前句付点者として立机したのは宝暦七年(一七五七)八月十五日だが、その初会の勝句十三頁の後記にこう記している。

「先達而御断申上候通 私儀神を祈り正直を元と仕候故見苦敷開御覧入申候(下略)」という世人の御憐びんと御ヒイキを一重に願う卑屈なまでの口上を述べている。これが天下の柄井川柳の開業ぶりであったわけだ。この初会の寄句は僅かに二百七員であった。

斯様に江戸の数ある雑俳点者に伍して昨今馳け出しの柄井川柳だったが、その五年後の宝暦十一年十月には集員一万五千句に迫る有

力点者にのし上っている。さらに六年後の明和四年には集員二万五千句を得て立机後十一年目にして江戸一流の点者となり、その宿願を達成した。

万句合興行の成功が不成功かのカギを握る最も重要な事柄は、江戸の前句付趣味に関心を持つ組連をいかに懐柔するにかかっている。集員の最大の原動力は、この組連の動向に掃一する。柄井川柳当時は江戸市内に二十団体もの組連があり、評者の人気でその勢力を左右していた。飯田中町の錦連は川柳・机鳥・露丸の三名を擁し、明和二年には「春楽三評」を催しているが、二年後には川柳の定例万句合で市ヶ谷の初瀬連が筆頭格となっている。これらの組連は、万句合の開巻されないオフには、東西角力句会を開き競吟したりしている。牛込御納戸町の蓬来連は、朱楽菅江の序を得て「川傍柳」を出している。組連の勝句を板行し、それを組連が取次店として販売を担当するという仕組みから、組連の偉勢が点者収入を左右していたわけである。

柄井川柳が立机した時点で、江戸の万句合点者の筆頭格は収月・蒼翁・蝶々子のいわゆる名家三羽鳥が羽振りをきかしていた。特に収月は、寄句二万という興行で、東都随一の

偉勢を誇っていた。

収月の取次所は三河町八橋連で、当初は新進の川柳評を敬遠する貫禄をみせた。時に柄井川柳は駒込老松と上野桜木の二つの組連が取り所である。収月の点者としての人気は、「句体軽く談笑をもとし句柄よし」で万句

合勝負一枚措の常識を破り、二枚措にしたのも収月である。「俳諧筆鸚鵡(玉曆十三年刊)で「前句付中興の点者」とほめ「前句付の真髓の鼓吹者」として俳諧側からする雑俳評を試みている。柄井川柳の勝句の方針は

「前句にかかわらず、古事時代事趣向よろしければ高番の手柄有、すべて恋句、世話事ばいしよく、下女などの句に新しき趣向むすべは手柄多し。年々の勝句味に考えるべし」とあり、彼の作句指導は「趣向即ち構想の技巧」を掲げている。このことは「穿ち」に重点を置いてきたことが会得される。

川柳評立机の当時は、江戸句も一派を成していた。即ち貞門・談林を抜け切れない上方風と、いま一つは、拘束感のない庶民感情をそのまま句にするという形のそれである。収月の人気は後者に属するわけで、この指導理念を徹底的に「穿ち」本位で実践したのが柄井川柳である。ともあれ柄井川柳が当面の強

烈なライバルは収月であり、この目標達成にいわば挑戦し完全に収月を圧倒して上位につくまで、実に十余年の歳月を要している。このようにみえてくると、収月の江戸句は、川柳点を凌いでおり、川柳の実質的推進者は収月だったという理屈にもなる。

収月は初代から四代目までの世襲であったが、初代収月は日蓮宗徒で、三代二徳亭収月撰「月花集(寛政元年刊?)」によれば、その戒名は収月院日田法師で元文五年没。二代目は仏徒で戒名は伝譽昌盤居士で宝曆七年に死去している。これからすると二代目収月は、柄井川柳立机の年に死んでいることになる。(いずれも死去の年齢不詳) 柳多留の編者呉陵軒可有は、同誌四篇(明和六年刊)の序文に「享保の頃収月出て世話事に句意のおかしみ専ら撰しより……云々と記しているが、この編集の際は、収月の三代目に当たっていることになるが、収月に関しては一切、右以上の事には触れていない。柳多留八篇まではすべて万句合の勝句である。収月撰の勝句収録も決して少くはない。しかし、一切そのことは可有は頼かむりで通している。憶測すれば柄井川柳と二代目収月の確執は相当深刻なものがあつたということになる。



清 博 美

誹風柳多留廿五篇研究

— (二九丁) —

514 すいくわで帰り女房おこすなり

西原—吉原の素見氏、日本堤で西瓜を買って喰った。

西瓜二切で吉原見て帰り

天二・仁4

そして夜半帰宅したが、空腹(よき女)を見ての欲情と、西瓜腹は一時しのぎになるが、大部分が水分であるから、腹も(へろう)に堪えかねて、女房を起こす。

鈴木—賛。この女房は随分とおとなしい。

室山—「西瓜」と読めば礎解、「水火」と読めば「水炭」と同じく、仲の悪い義となる。これなら遊女に振られて……となろう。

八木—礎稿賛。

とぼるまで西瓜を喰って待あハセ

拾七・1

吉原の土手で西瓜を食ったこと、珍しくない。

西原 亮・鈴木
入江 勇・清
紀内 恒久・青木
博美・八木 敬一
迷朗・故岡田 甫

礎の通り西瓜をくっただけの素見

紀内—礎稿賛。八木氏引用句より西瓜説妄当

青木—礎稿賛。「女房を起す」が妙。西瓜だ

けの消費で、女房で間に合せるところに、ミ

ミツチさを感じるが、庶民の偽らざる実情を

横溢させている句と言うべきか。

岡田—同。

515 ちとおしへやうかかわる下手将棋

西原—同じ将棋でも、つまらぬものは名人同志将棋(新四上り)。それにくらべて下手(へぼ)将棋はおもしろい。まず舌戦に始まり、

舌戦に終始し、舌戦に了る。交替するときは

どんなへばであつても「ちと、おしえさうか」という。

どりやおしへよふかと箱へ二枚入れ

(安四・晋5)

(これは本当に強い人、二枚落ちで)

室山—同。岡目八目で横から見て下手と思うので、だいたい、同じぐらいの腕。おれくらいかと思うのは、かなり強いもの。

青木—同。

つめ将棋工夫が出来てどれのきやれ

岡田—同。

七・28

516 花角力取らふと天狗日待也

西原—花角力は木戸銭なしの角力で、花(寄附金。掲示には倍にして書く)を以って興行した。天狗は力自慢の者で、日待は、その日

を待つというほどの意。要するに力持ち達

が手くすねひいて当日を待っているであろう。

室山—同。「花相撲」は本場所以外に臨時に

行なう相撲で、礎稿の如く、木戸銭をとりず、

纏頭だけ受けたことから、この名がある。「花」に天狗の「鼻」を通わせたか。「日待」を本

来の意と解したら、その日の女性をねらう男性ともれる。

入江―お日待(一晚中寝ないで夜を明かす)に集った者の中に角力自慢(天狗)な奴がいて、どうたおれと外で花角力でもとるべいか。江戸でも日待はあつたらしいが、句は田舎が多い。

岡田―「日待」は江戸でもやつたらしく、句が相当ある。この夜は寝ないでいるのだから自然に芸づくしとなる。天狗がもし日待をやつたら、角力をとるぐらい(もちろん木戸銭などは不要)……という軽いユーモア。

517 気の毒さ家財ごふんで書て居る

西原―一家離散、家財が競売に付される。黒い板に家財名が「胡粉(ごふん)」でどんどん書かれていく、それを見てその家の不幸を想う。

室山―同。分散。

岡田―同。

518 百鬼夜行をこしらへる雨やどり

西原―雨やどりの姿を見ると、あたかも百鬼夜行の如き身ごしらえをする。百鬼夜行は、いろいろな妖怪が列を示して夜行することである。

年の市すこぶる百鬼夜行也

ことやうのすかたも見える俄雨

五八・32

拾一・20

八木―賛。であるが、日野資朝が東寺の門で雨宿りをした故事がにおうような気がする。

紀内―一般句であろう。尻をはしよつたり、こもをかぶつたり、風呂敷で雨をしのいだり、小ぶりになったら雨の中へ出ていく準備。岡田―賛。

519 お土産に是もなさいと飛車を出し

西原―江戸ッ子の気性に合ふは飛車のまま

一三・7

飛車は将棋の駒のなかでも江戸ッ子に珍重された。王子の槍祭りの土産に飛車もという洒落であろうか。

室山―「飛車」を『和名抄』にいう、風に乗じて空中を飛行する車、と解すると、故事句と考えられる。が、孫悟空・依藤太その他いろいろと考えてみたが、びつたりしたものはいない。嵐も一応浮かんだが、これもだめ。

岡田―難句。どうも故事がありそう。室山氏もちよつとのべているように、「飛車」を将棋のコマと見ないで、飛ぶ車の意か。とにかく、本句は宿題。

520 ふげん様一たびぢりめんをしめ

西原―摂津江口の遊女のひとり、実は普賢菩薩であつたという俗説、特に謡曲「江口」よりの作句である。

緋縮緬の湯具は玄人女をあらわし、ここでは江口の遊女になつたこと。即ち普賢様も一

度は遊女になられたという意。
江口にて仏も一度緋ぢりめん

三五・39

室山―賛。この篇では二、三度おなじみ。

青木―同。

緋縮緬けだし普賢の済度なり

六七・7

岡田―同。

521 泣くみへ小便組がけちをつけ

西原―「泣組」とは、小便組に対する造語と思つが、よがり泣きをして寵を得る妾奉公連中のことであるらしい。

小便組は「楓軒偶記」に「大家の妾とし：漏らさしむ」とあり、前金をとって追い出されるようにし、返金しない悪質な妾奉公連中である。それが泣組に対して悪口を云つていふのである。いずれにしても五十歩百歩のことであるが――。

室山―同。そういつた世辞めいたいやらしさがないというのであろう。「泣く」と「けち」とはやや対照的な語と思われる。

八木―泣組の例句ありますか。

青木―同。小便組は例句多数あるが。

岡田―本句の「泣く」はメソメソ泣く意。妾ばかり殿様が寵愛するので、奥様は泣きの涙の生活。それを「泣き組」と云つたのは、妾の三昧に対し奥様は琴、琴には組み唄というものがある。その「組」の語を使用して、琴を、そして奥様を暗示した作。

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

月原宵明

補聴器で息子夫婦へ割って入り

仲どんたく

昭和生れにもつ定年。明治、大正は実に遠くなりけりである。老人は逐次世間から隔離され、家族にさえも相手にされず孤独に置かれる。殊に難聴ともなれば一層寂しいであろうし、夫婦の中に割込む「補聴器」の心状が痛い程身につまされる。

充電された顔で出て行く月曜日

本多 柳志

働くために遊ぶのか、遊ぶために働くのかサラリーマンの人生観は複雑で焦点がぼけてくる。充電した顔はよろこぶべきで、近頃は疲れ切った月曜の顔が多いのでは……。

打算のない恋を両親危なかり

金井 文秋

理想の男性像は昔は生活能力第一、今では愛情が第一、設計も無い癖に「倅せにします」と言切つて親達を驚かす。「打算のない恋」

とは全くうまい。

さて今日ほどの手で男靴を履く

西岡 洛酔

家族達はバイバイで送ればことが済むが、男は違ふ。七人の敵に立向う作戦進攻の門出である。この句から一種の悲壮感さえ窺える。どの手で「行こう」の省略も成功である。

日本にジャンケンと言う知恵があり

高杉 鬼遊

五本の指の操作で明・暗を分け、採・否を決めるのに日本特有のジャンケンがある。汗と涙の延長戦も引分の時は簡単にケリをつけるのにジャンケンを使う。日本人は案外に割り切つてこの法則に従う諦めを持つ。

チャップリン氏の靴に似てくる父の靴

不二田一三夫

この句から微塵も滑稽を感じさせない。漫才作家一三夫さんの作品から、おかしみは哀愁と隣合わせといったものを感じさせる。「氏」一字がこの場合滑稽さを越して、尊敬の念が湧いてくるから一字は大切である。こんな父の靴に万才を叫びたい。

素人に読める書道は選に洩れ

遠山 可住

ユーモアの湧く句、芸術はより深く、より崇高なものであることが解る。良く書けていると思う字より、鳥が飛んでいるような点と線のつながりが見事入選だから、素人には合点が行かない。

月へ飛ぶ夢は忘れぬ竹とんぼ

香川 酔々

明治大正生れに懐しい夢を見せてくれる。空でなく、屋根でなく「月」であることが如何にも童話的で情緒あり、竹とんぼの哀れさに触れている。色紙、短冊に載せたい句。

手袋を片方落して春近し

村上 春巳

ほのぼのとした句で、片方落した手袋に執着を感じない位春らしくなった。理屈抜きの清楚で淡白な叙法のさわやかさ、こんな川柳を忘れてはならないと思ふ。

てのひらにいくたび盛りし善と悪

河野 君子

人生とは喜怒哀楽のドラマである。私もときに人生坂の起伏を回想し、自らを慰めることがあります。苦勞人君子さんの歩んで来た道は正しいものであった。しみじみと生きることにむずかしさを教ええられる。

切り花の哀れやしばし水を呑む

小砂 白汀

弱々しい切り花の最後の最後まで、生きようとする努力を忘れなかった。「水を呑む」擬人法が一そう花のいのちのはかさを、訴えるものがあつた。共感句四句

給料の軽さになれた靴のちび

高橋 鬼焼

ときめきの夜は明るいところが好き

福本 英子

帯止めに女残して一人住み

錦織 文子

道楽をした白髪とは妻がいう

藤井 明朗

西尾菜句碑建立 除幕式と記念句会

一步出ずれば 我れ 旅人となる心 水鶏庵 菜

とき 昭和55年 5月18日(日)正午除幕式(神式)

ところ 八尾市八尾木公園

近鉄八尾駅下車駅正面バスターミナル近鉄バス
瓢箪山行又は恩智行に 乗車八尾木下車



記念句会

祝 兼 題 中 島 生々庵
川柳塔主幹
日川協理事長

公 園 河村日満氏選
鳥取県川柳作家協会々長
川柳塔主幹 川柳選者

菜の花 川村好郎氏選
川柳塔主幹 副理事長

水 去来川巨城氏選
ふあうすと川柳社主幹

鶏 磯野いさむ氏選
日川協常任理事
藤原川柳本社幹事

旅人 三条東洋樹氏選
日川協常任理事
時川柳社主幹

五月 山田良行氏選
日川協副理事長
北国川柳社主幹

一步 西尾 菜謝選
日川協常任理事
川柳塔社副主幹

席 題 なし 割烹 日本海
午後二時(二句吐)

会 費 五〇〇円(作品集・軽食含む)
二、〇〇〇円(夕食)

懇親宴 二、〇〇〇円(夕食)

句碑建立委員長 日川協理事長 中 島 生々庵
川柳塔主幹

同 副委員長 富柳会々長 阿 部 柳 太
川柳塔副理事長

同 副委員長 高 杉 鬼 遊 風
川柳塔副理事長

同 代表委員 高 杉 鬼 遊 風
川柳塔副理事長

同 代表委員 香 川 醉 遊 風
川柳塔副理事長

同 代表委員 板 尾 岳 人
川柳塔副理事長

趣 意 書

この度、川柳塔同人有志の発起により、西尾菜句の句碑を八尾市八尾木公園に建てることになりました。

氏は川柳塔の副主幹として塔社経営、企画に参画し又、同人選者として卓見をもち昭和五十一年より日本川柳協会常任理事として活躍し今日に至っております。

なお、昭和六年七月阪大川柳会に入会して故麻生路郎先生の指導を受け、柳歴正に五十年に達した喜びをも含めての企画であります。

ついでには菜氏辱知の皆さんにも左記要領でお力を貸して戴ければと存じまして御案内申し上げます。

記

句碑建立基金 一金壹千円也(お一人一口)

昭和五十五年二月吉日

句碑建立委員長

日川協理事長 中 島 生々庵
川柳塔主幹

▼基金窓口〒542大阪市南区鰻谷中之町二〇 川柳塔社内西尾菜句碑基金係
または〒581八尾市中田二丁目三〇二 高杉鬼遊方同係。

水煙抄

菊沢小松園選

京都市 山本 桐下

暮洗うどの子の影も崩れない
赤を赤と言いたい辞表書き終える

まだ泣けるから敗けたとは言わぬなり

実印を綺麗に押しして弱い父

手を振って終る出逢いにしたくない

出雲市 石倉 美佐子

一線を引くペンシルを太くして

順序よく誰かが決める並び順

情愛が絡んで白い梅は咲く

雪女連れ去る春は足早い

人間に還れば円い声になる

島根県 角 耕 草

パイパスに掛る田圃を羨まれ

植え終る日を出稼ぎの日と決める

躍勝った男に鯉が跳ねてみせ

蔵酒の香を浸みこませ父帰る

大阪市 堀口 欣一

子を背なにママは煙草の灯をつける

何時来てもやはりよろしい京の雨

家族みなしさいズ恙なし

いくなれば僕のは薬用ウイスキー

名古屋市 越村 枯梢

終着の駅は無人かも知れず

太陽はここにも小さい影がある

一匹の後につづいた蟻の列

ふと父の弱さに触れた仁王門

旭川市 朝倉 大柏

風かばう位置で二人の歩が揃い

巢立たせて時計夫婦の音になり

裏切りを見事な歌にする譜面

我の強い脂肪男の鼻に浮き

熊本市 有働 芳仙

三年目オイとあなたが板につき

嫁ぐ娘に贈る言葉にトゲがない

隙のない挨拶冷たい風が吹き抜ける

町田市 竹内紫鏞

三車線一姫事故もなく老いぬ
旅支度あずける犬の癖も告げ
翻訳に老眼鏡の稼ぎぶり

三流の客玄関であしらわれ
動の町都心縁に飢えている

東子市 小山悠泉

岸和田市 津田千舟

散歩でもしてきなはれと追い出され
颯爽とブーツを履いて嫁き遅れ

子の事で妻が反旗をひるがえす
さびしさをロマンも捨う一人旅
人生の余白を埋める粹さがす

大阪市 西出英子

鳥取市 中森葉士人

古きよき話題火鉢を抱いている
あざやかに角道利かしている微笑

時刻表せめても旅の香にひたる
風見鶏これも一つの生き方と
親の脛限度と見たかバイトする

和歌山市 坂部紀久子

富田林市 中村優

まだ齢に自信が満ちるユニホーム
孝心にお金のいらぬ母の肩

おそ風呂へ主婦を流して妻となり
用はないけどあんと呼んでみる
娘の電話何かがあるなと母の勤

島根県 堀江百代

尾鷲市 渡辺伊津志

投錨の波にあわてる夜光虫
廃屋の柘榴玉砕思い出し

白髪ふえ鏡に歳を見つめられ
いやな事知らないふりしをしての無事
生返事聞いているのかいないのか

大和高田市 岸本豊平次

羽曳野市 麻野幽玄

出勤の朝より早い通院日
残り火のとかくの世情へ耐える寡婦

学歴に先を越されて固い椅子
三寒が四温を連れずやって来る
お茶も辞し座蒲団も辞し話し好き

大阪市 小谷清女

ママにだけある拒否権で持つ家計

約束をダイヤの指でにぎられる
泣かされる子もなし恐い記事たたむ
又一人老人欠ける回覧板

富田林市 大道美乙女

逢うて来た余韻を包む雪明り

売れ残る数の子女踊らない
出雲市 園山 多賀子

新しい木の香は釘を感おせる
猿知恵は不信の瞳向けられる

岡山県 池田 半仙

努力まだ足りぬか脱皮手間がいり

ストレスを溜めて歯車よく軋み

和の額の部屋で大きい声になり

高槻市 竹内 花代子

受話器とる声は誘惑される声

年賀状下手下手なりの字を並べ

そばに居るただそれだけで安堵する

鳥取県 和井 観洋

それ言うてしもたらあかん火消壺

ポケットベルが邪魔をしていた適齢期

この嘘に捺印などはしとくない

倉吉市 田民 碧水

留守番は猫と一緒に昼寝する

独り言云う暇もなし農作業

いつまでも子供ではない子の色香

尼崎市 中谷 利美

兵古帯は結ぶものではないやくざ

男には懲りた女の厚化粧

走ってるつもり足の足が従いて来ず

福山市 桑田 静子

束の間の女の哀れ舞いおさめ

十円の差額チラシに走らされ
豆餅がまた皮下脂肪へ置き土産

米子市 雑賀 美世

前進の出来ぬカニにもあるあせり

捨て切れぬ夢一すじに書く日誌

病室に孫が陽気もさげて来る

新潟県 高野 不二

年金の不安をそそる記事ばかり

どこ迄口出せば気がすむ組合か

貰う迄にまだ値切られる年金よ

島根県 園山 栄

番犬がなつけば殺せと云う指令

訪う人もなくて夜更けの茶のかおり

自画自讃天に向って吐いた唾

豊中市 満仲 きく子

われ鍋にとじぶたごちやごちや言い乍ら

気どらずにそのままのまま福笑い

袋小路それなら出口見つけまひよ

大阪市 藤森 小雅子

おとぼけが上手になった鞆持ち

酒のうえだと好意的な嘘もあり

角とれた人間仮面はずさない

大阪市 橋元 美恵

何もないけどハートにはリボン付け

ドロドロと私の膿が文字になる

厚化粧心が読めず決めかねる

今治市 矢野佳雲

渡り鳥善人に会うコース選る
齒が痛いので決断が早くなる
雑兵も燃える火繩は持っている

和歌山県 天満三千代

飛行雲平和の空で美しい
ひとり言負けた自分を慰める
顔出した欲がいく道変えたがる

和歌山県 富上光代

思い出の街角風に其の後問う
ブランコを揺する風の子一人ぼち
次々の迷いを生きる標しとす

鳥取県 加藤茶人

笑っても泣いても絵になる児と遊ぶ
出直しの布石小さな積木積む
脇役の付かず離れずいて丸い

大阪府 野田君枝

今日からは甘えてられぬ満はたち
海外へ金捨てに行く顔がふえ
つめ腹を切らされるまでしがみつ

出雲市 吉岡きみえ

寢床までサロンパス匂うて母の息
職捨てた男の面を寒の月
光りさすガラスに少女恋と書く

兵庫県 野々口ゆう也

朝昼晩老齢という枠の中

狂ってる世相に老が蹴つまずき
俺は俺隣りの音は気にしない

岸和田市 原 さよ子

知恵おくれの子に人情教えられ
割り切った心に空しさだけ残り
親のいない里はだんだん他人めき

和歌山県 堀端三男

定退の二年目銀行寄って来ず
横断歩道白い杖は確かです
眼をうばう外車にもある祈禱札

米子市 桑原伊都

店頭へ王者顔した松葉ガニ
がまんしている傷口にさわられる
この次は何けちろうと赤字みる

新宮市 辻 式

考えるポーズ居眠りしてただけ
踏みしめた一步は近道等知らぬ
一步出る前に男は空を見る

島根県 岩田三和

肺二つ二つの思い深呼吸
海水も涙もおなじ塩からい
こじんまり大蔵省はコタツにて

唐津市 浜本久仁於

国境はやっぱりあったオリンピック
歳月は五尺二寸の影に似て
影法師悲しい時だけ居て呉れる

梅を観に来いと電話のなる土曜
唐津市 田口虹汀

悪縁と云いつつ越して来た峠
悪い事したなと思う中は無事

唐津市 浜本義美

KDD二人死んでも頼かぶり

大根もやがて切り売りされるだろ

電気ガス値上げ土俵に揃い踏み

和歌山県 時田誠一

カレンダー何をしたかと問うよううで

笑うしか術ない僕に皮肉言う

医学書の症状すべてあるよううで

吹田市 藤原世史春

お役所がお役所に調べられ

黄金虫まるい背中に平和見せ

自衛官自分の家はよく守り

尼崎市 小林文月

おふくろの味を夫に喰べさせる

肉とらる餌とも知らず豚は喰い

島根県 松本文子

円満な夫婦疑わぬだけのこと

だんだんに父が似てくる地藏さま

呉市 山根里香

愚に還る才女が叩く寺の門

夢ひとつ消え未完の絵持ち歩く

広島市 すがかつこ

地に足がふらつくくちべただっ
ていい
おもいやりのひとつひとつの
独楽まわる

岡山市 串田句味地

掘り下げてじいっと心の底を
見る

人祈る善意へおかげが追うて
来る

倉吉市 今村夕路

いつまでも路傍の石で居らぬ
人

罪つくり便利な自動販売機

鳥取市 森田熊生

サイレンが遠のき茶漬食べ直
し

辛せをしまふ金庫の鍵がない

寝屋川市 高田てまり

言訳の話しは他人に押し付け
る

ウインドが確かめていた春の
音

島根県 木村はじめ

黙秘権みかんの筋をみんな取
り

喝采も聞かずじまいで古稀の
旅

寝屋川市 立床晴風

財布の底そつとのぞいて出る
稼ぎ

騒音も車内の手話へじやませ
ず

竹原市 古田寛子

よだれかけつけければ赤ちゃん
らしくなり

夫いれるお茶がおいしい冬の
夜

竹原市 古田鈍舟

すねに傷持たぬ人生虚しか
ろ

オアシスへあえぐ歩巾のもどか
しき

夕刊が妥協してくる家出人
赤のれん男の未練ぐつと呑む
大阪市 白石 潔

表札の余白を埋める嫁が来る
朝に掘り夕べに埋めるガス工事
京都市 松川 芳子

針供養豆腐こんにやく地獄の日
新入りを老人ホームいびりそめ
羽島市 伊藤 静枝
諫早市 江副 二牛

青春を軍歌と共に悔はなし
出港を惜しむ錨の一しずく
唐津市 桑原 掬治

食い逃げのかまえて雀二羽三羽
物価高いたちごっこに歯止めなし
唐津市 筒井 朴竜

農政の矛盾は減反奨励金
背徳のご仁よ良心背負うべし
唐津市 山下 勝一

研修会済めばボルノで肩ほぐし
悪運の強いばかり生き残り
倉敷市 大森 登竜

還暦はまだ乳くさい喜寿米寿
催促もようしないのが金を貸し
大阪市 田口 なりこ

お年玉渡せばすぐにさようなら

戎さん欲の深さに苦笑い
大阪市 平井 露芳

消費者の力に数の子寄り切られ
ドラエモン子供の夢を皆叶え
米子市 菅井 未知

伝言を頼まれ道順かえさされ
白足袋の動き茶室をしんとさせ
熊本市 北川 一進

新築の部屋に隠居と言う狭さ
にらめっこどっちもどっち笑いこけ
浜田市 佐々木 裕

月明かり靴音だけが従いて来る
献杯でチャッカリ自分を売り歩き
橿原市 西本 保夫

まだほくを必要とする事務管理
ベテランのプライドだけは持ちつづけ
枚方市 藤本 阿蘇美

学校の笑いがもれる春近し
酒タバコ珈琲紅茶の冬籠り
大阪市 山田 ふみ代

寄り添って倒れず回わる夫婦独楽
大阪に生まれ親戚ない暮らし
八戸市 島田 昭治

土壇場の嘘神様も目をつむり
愛などたかが浮気をけしかける
岡山県 柳原 孝柳

他人とは言いたい事がよく言える
女一人今日は仮面を剥ぐ日なり

倉敷市 中島彩平

少女未だ書いては消したイニシアル
脇役のまま停年務め上げ

兵庫県 中田白李

老妻と金のことには触れず住む
戦争は知らぬ斗争だけに生き

高知県 山下登舟

二葉出てまだ大根とも無とも
新聞もテレビも暗いニュースのみ

大阪市 林ひろ子

好物の湯豆腐我が家は京の味
五輪への夢失なつたパスポート

今治市 新居田胡頼子

末席で逃げたい腰が斜め向き
通院の馴染みの顔が減る焦り

泉佐野市 大工静子

春めいて古稀には古稀の化粧水
生字引と言われた人も死期読めず

出雲市 板垣夢酔

当りくじ多くしろとははずれ者
晩酌のときの話して頼りなし

鳥取県 羽津川公乃

折れた指隠して虚勢の松葉蟹
土壇場で逃げる男に策がない

自立する女暦に目もくれず
チューリップかいた幼い日を恋うる
米子市 青戸美佐

(前月分)

電話口娘の愚痴も聞いてやり
ひとり居のわがままになる掘炬燵
島根県 堀江百代

初春の蟹鍋囲むくに訛
孫が去に暫くけちと同居する
米子市 野坂なみ

はつ笑いコンビの話術春をのせ
初曆み早や一月をめぐり見る
米子市 三戸静絵

雲動く下界に何が起ころうが
ランドセルいつまで父と入る風呂
今治市 渡辺南奉

泣いて済む程には世相甘くなし
あすで無く今日来て見ると桜咲く
東大阪市 三宅哲夫

天皇賞の馬も干草で飼われ
又いやな入試の季節やって来た
小松市 馬場魚山

新顔が自由の風を流し込み
一日の疲れを癒す柚子の風呂
大阪市 岡田ふみ

新顔が自由の風を流し込み
一日の疲れを癒す柚子の風呂
大阪市 村島秀村

跳上る物価に福祉下り気味
島根県 山根峰雪 アルバムにむかし恋した顔もあり
和歌山市 細川幸代

まだ話すことがあるのかドア締めず
鳥取市 武田帆雀 未練もつない夜のまねきねこ
神戸市 久保禎三

人生を悟る椿の花が落ち
岸和田市 吉水照江 万引を見張る店員立ち読みし
★ 大洲市 米沢暁明

苦労性社会面から読みはじめ
寝屋川市 福富隆子 家中が鬼を追い出す豆をまく
在宅を確めていく金のこと

栄転を祝う上座にある若さ
山口県 高崎雀声 合格の思いを今に柳の芽
一しずく落ちた墨から書きはじめ
岐阜市 市川鱗魚

登記所でひと旗組が屯する
大阪市 大野武太 花の芽が動く自然に嘘がない
筋通す男小悪を憎み切る

シグナルは赤だよ心の重い日日
島根県 星野侑正 有棘鉄線いくさ話は遠くなる
夫婦鈴出雲へ返す別々に
鷺かぶら春の女神が動き出す

とうさんと言われた頃が花だった
大阪市 岩田八文銭 見する。雅名に關係なく、句だけ拝見して選
んで居る。後で名前を見ることにしている。
その方が興味もある。名は体を現わすという
が、句だけはそうは行かない。男もない、女
もない、古さも新しさも關係なく良いと思っ
たものは選んでいる。それでよいと私は自分に
言い聞かせている。昔はよく熱心な人達があ
って落ちた句の何処が悪いのかとよく手紙や
る。これも選者の責任だと思っている。

選者交代に際して

菊沢小松園

この月からまた一年間、水煙抄を見ることになった。老来歳月の早いのに今更のように驚いている。水煙抄の投句者の新しい名前、古い名前、その中に幾人かの顔、顔、かおが浮ぶのも楽しい。私も楽しい思いで毎月を拝



村田瓢太著

句集「紅華」に寄せて

西田柳宏子

瓢太さんが柳歴二十五年を記念して、句集「紅華」を刊行されたことは本当に嬉しく、心からお慶び申し上げます。瓢太さんの奇術教室に初等科、中等科、高等科と一年半入門した弟子という立場からこの一文を書かせて頂くことになりました。先ずお祝いの言葉

「先生句集刊行おめでとーございます」

さて瓢太さんの経歴や、お人柄については序文で川村好郎氏が述べて居られ、また編集助手と題した不二田一三夫氏の文中にも紹介されているので、私は飽くまで「紅華」を読ませて頂いての感想ということに重点をおいて述べて頂きます。

題字にふさわしい真紅の表紙、中川裕皓先生の題字、野村暁星先生の屏絵、カットの瓢箪等々その素晴らしさに眼を奪われた。

何はともあれと読み出したら、それこそ一気に最後まで読んで何とも云えぬ爽やかな読後感にひたっていた。

どこにも転っている素材で、誰にもよく判る、気取った処のない素直な句、それでいて

結構論ませてくれ、失礼な言い方をお宥し頂くならば瓢太氏のお人柄そのままに、対話しているような思いでした。

わけても一番明るく微笑ましく人間瓢太さんの好々爺を浮彫りにしていたのが三十七頁から四十七頁に至る「孫」二十七句である。どの句を執り上げても孫を温い瞳でみつめている祖父の情に溢れている佳句が揃っていて嬉しい頁でした。

サラリーマンの章は同じサラリーマンの私に共感を呼ぶ句、身につまされる句が目についた。

サラリーマン世辞も言い得る歳となり
ポナナスはいつも予想を下廻り
新入社みんなきれいな目をしてる
貧乏ゆすり課長になってもまだ止まず

肩書が付いて名刺を出したが
宮仕への悲哀哀言にたいこ言えず
学歴の差あや席に耐えたい

会社やめれば出入商人振り向かず
前歴は忘れ一から出直す気

等々の句にうなずく人も多いと思われる。
次は瓢太さんと切っても切れない「手品」の章に目を通すと、意外に句数が少ないのが面白いと思った。

蝶タイを締めれば芸人らしく見え
白のタキシードに蝶タイをしめた瓢太さんの
発表会の澄ました顔を想い出す。

本番であがり手品の種がばれ
間のもてぬ素人手品にハラハラし
の句に奇術教室の校長瓢太さんが舞台の袖で
氣を揉んでいる姿が浮び上ってくる。

手品の鳩大空翔ける夢を見る
手品師の帽子は次々物を生む
と小道具をうまく紹介し、

この人がやってこの芸生きてくる
真打は仕事だけでも笑わせる
芸一筋世事には疎い役者馬鹿
等々の句に芸に対する鋭い目を向けている。

非常に旅行もお好きのようで北は北海道から南は九州まで、本州各地に足跡を残されたようであるが、小まめに行く先き々で句を残して居られるが、旅行吟は御多聞に洩れず報告川柳的なものが並んでいるのは止むを得ぬものと思うが瓢太さんの豊かな感受性をまざまざと見せられる思いである。

日本国の最南端を洗う浪
造化の妙にしばし声なし層雲峡
百樹百草小鳥の声のびのびと
痩せ土地に生活の知恵千枚田

アバンチュール遂になかった独り旅
「酒」の章に目を移せば、会社でのお仕事の

立場上社内宴会の場の句が目立つ。不幸にして私は瓢太さんと腰を据えた酒席のお付合いがなく、どの位の酒量か又どんな酒飲みなのかわからないがどうやらやりくりが上手で万年幹事役の部類とお見受けする。

飲め飲めと未練話聞いてやり

末席はあきらめ顔の手酌なり

「俺の盃受けられぬか」と又酌がれ

これしきの酒に酔うかと酔いつぶれ

酔いつぶれたふりして聞いた裏話

そして

茶碗まで灰皿にして宴終る

本当に御苦勞様でした。

旅が出て、酒が出たら次のコースは矢張り

「女」と編集も仲々手がこんでいる。僅か二

十七句の収録ではあるが、母あり妻あり娘あり、ストリップあり芸妓あり、服飾あり、氣

腑あり、仲々多彩である。

三面鏡女は徐々に化けてゆき

淑女と思いきや河内弁の啖呵

女もう己がボーズに酔っている

スカートは短くなる分靴が伸び

女独り生き抜く夜の化粧する

ミス日本でもやっぱり嘔するだらう

等々の句に幅広く女性に接している瓢太さんが窺える。

丸紅という大企業の厚生部門に永年勤務された瓢太さんの目を通した時事吟は流石に鋭

いものがある。

余る米わざわざ古くして配給

ストをして謝るどころか値上げ決め本当のことを喋れば首が飛ぶ

安方呂が突如茶畑から現われる

更に詩人瓢太さんの春夏秋冬にその風流眼と川柳的な批判をみせられる。

元日や昨日と違う陽の光

三寒四温シャツを脱いだり着こんだり

スト二日盛りの花を見損ない

春うららミニの尻でも無でたらか

大ジョッキ泡だけ損をした気持ち

散り果てて御堂筋の空広くなり

泉水の金魚動かす今朝の冷え

大晦日千定の歳暮まだ着かず

愈々大話は句集名に因んだ「紅華」の佳句群

目をみはった。

手品師の上着はネタの隠し場所

は些かネタ割の感がする

アテランスつけてしみじみ見直され

に改めて巻頭の写直を見直した。

正論を吐くので煙むたい人にされ

清流に育ちしぶとく生きられず

何時の間にか婦唱夫随で平和なり

白黒と裁けず灰色などつくり

無責任な奴ばかり育て民主主義

腹の立つ国会爆弾でも投げたらか

浮き沈み世話した奴の世話になり

初盆へ鰻夫は飲むよ芸がなし

としよりをおだてて敬老の日終る

あわてた証拠ステテコ逆にはき

たかが風邪位に仰山薬くれはった

口八丁ほどに手の方ついて来ず

人間瓢太さんを目のあたりに見るようだ。そして最後に出来る句集「紅華」にこよなき愛情をこめて

体裁も上々初の句集成る

瓢太さんの益々の御健祥と御健吟を心からお祈り申上げてベンを擱します。

★

快調な売れゆきをよろこんでおります。もちろん売るのが目的ではなかったにせよ、読んでくださる方々からお声が掛かるとうれ

いことです。ありがとうございます。とは著者のことば。

序 文 川 村 好 郎 美 装 箱 入 り

編 集 不二田 一三夫 千田・送料共

〒570 大阪府守口市金下町二の二〇村田

瓢太―または本社でお取次ぎいたします。



Plus

高級洋菓子・レストラン

堺市役所前

TEL (21) 2 3 3 4

愛染帖

橘高薫風選

川西市 戸田古方
 膳脂の車体大寒今日で終る日の
 手あたり次第メモをしといてそのまんま
 高知市 西川富恵
 神に逢う坂かも知れぬ花吹雪
 ささらぎの花屋のこぼす花の露
 和歌山市 桑原道夫
 音楽など鳴りはしないが女来る
 見てならぬものを見てから免の眼
 青森市 工藤甲吉
 それは北の愁いの色の鉛色
 一匹の鬼に変じるのも女
 大阪市 小出智子
 風呂の湯を落すときにも流される
 隣の犬かごろ妻とうまが合い
 町田市 竹内紫鏑
 送金の痛みへボンと局の印
 計算尺位牌のように抽斗に
 八尾市 宮西弥生
 金持も乞食も好きな桜です
 横文字で来た詫び状で許せない
 八尾市 高橋夕花
 なににことも知らぬ存せぬ寒の庭

齋微の束壺のころは満たされぬ

鳥取市 河村日満

蹲踞して砂丘もじつと春を待つ

米子市 菅井未知

すこし名が売れて背のひをして歩く

大阪市 西森花村

披露宴今度は彼が白を着る

今治市 矢野佳雲

大正はふとる薬が売れた頃

兵庫県 遠山可住

無辺大真中へ富士一つ置く

和歌山市 浦野和子

イエスノー使わぬ日本の情緒

島根県 堀江芳子

ふるさとの夜は総出演の星

岩田三和

車内販売いきのいい娘にお茶を買う

島根県 堀江芳子

ウイスキーボンボン中いとさんの手のひらに

透巡の果てとは見えぬ落椿

大阪府 河野君子

雪しんしん夫の初恋聞く炬燵

同窓も古い先などと受話器から

儲からぬ肩書そつとおきにくる

教養のひとつに遊び上手ある

襟立てて風の言葉を待ちあうける

赤ワイン私をどこまで飾れるか

泣かされた涙見事な桶となる

アリゾナ廟恩響越えて冬の風

倉敷市 田垣方大

心地よき椅子に居坐り疎まれる

鳥取県 鈴木村颯子

恋人のうちはご免で許される

高槻市 若柳潮花

つねられて親の意見に従わず

今治市 越智一水

酒酌いでキクと呼んでと伏し目でい

高槻市 若柳潮花

思い出の土地へひとりて考え

今治市 月原宵明

ライターの炎のなかに君を見た

今治市 月原宵明

老妻も三歩下って歩かない

今治市 月原宵明

裸婦の画に倦きて金魚は動かない

竹原市 古田鈍舟

今どこで眠っているか桃太郎

倉敷市 水粉千翁

ほめられる頃の娘を呼び捨てる

島根県 角耕草

バンザイをしてもう駄目というしぐさ

名古屋市 越村枯梢

バス停に二つ三つ五つ晒し首

旭川市 朝倉大柏

献立を男がつくる飼育箱

豊中市 満仲きく子

色塗らぬ方がよいよい雪景色

兵庫県 円増貞子

格子戸の昔名残りの冬深し

和歌山市 津田与史

春が来た春が来たとして若からず

岡山市 井上柳五郎

ときどきはふり向いて見せ棄ておかれ

大阪市 川口弘生

みかん一つ摘み残してて庭は雪

尾鷲市 渡辺伊津志

暮れを待つ菊は静かに光るなり

出雲市

園山 栄

水山の向うで武装する領土

藤井寺市

児島 与呂志

うるおいの無い日々満員車にもぐる

和歌山市

西山 幸

聖母子の豊かさ祈りの貧しさよ

富田林市

岩田 美代

内所の願いに千円のお賽銭

羽咋市

三宅 ろ亭

轍から北国の雪消えてゆく

出雲市

板垣 夢酔

チカチカと臉の裏の悪だくみ

島根県

小砂 白汀

ブラットで行き違いになるひもしさよ

島根県

西村 早苗

大役を果し解いてる帯の音

羽曳野市

麻野 幽玄

雪のない冬では困る話聞く

枚方市

宮川 珠笑

貌拭うことを忘れた猫場で

岡山県

直原 七面山

失いし時を集めて時供養

和歌山市

松原 寿子

なお耐えて赤い命よナナカマド

和歌山市

堀端 三男

ふと靴を眺め絨緞踏んで行く

和歌山市

西岡 洛酔

的確を求める指に血のじしむ

和歌山市

筒井 朴竜

五輪への夢をアメリカ狼が喰う

唐津市

奥谷 弘朗

善人の様であちこち引掛かり

兵庫県

中田 白李

壺の冷たさ冬の陽が去なんとす

尾崎市

黒川 紫香

入試祈願孫が聞いたら笑うだろ

寝屋川市

宮尾 あいき

他人事かかわりもなく見てる記事

岸和田市

清野 こう

夢でよし百恵に触れた手の温み

米子市

小西 雄々

登ってる筈の峠にある下り

大阪市

北勝 美

うっかりと病間から見えた落椿

三重県

坪田 冬花

納得の皺を増やして老夫婦

倉敷市

小幡 里風

よく落ちた階段に子が又落ちる

米子市

桑原 伊都

缶ジュースぐつと飲みほしてから今日は

京都市

松川 杜的

掌の珠をもぎとる言葉飾りたて

和歌山市

福本 英子

雪の花舞えばは宴か修羅場か

島根県

榊原 秀子

飲干したグラスで揺れる影法師

室戸市

岬風 子

花道を老将肩から消えてゆく

和歌山市

坂部 紀久子

結婚をゲームの様に娘の電話

和歌山市

榊 みどり

酔っている女の視線は地平線

島根県

若宮 武雄

沈丁花あの体臭を押しつける

和歌山市

柴田 英壬子

ひる寝など出来ぬハートのチョコレート

平田市

久家 代仕男

聴聞の色気話も南無阿弥陀

岸和田市

原 さよ子

暇のないくらしで小銭ためている

島根県

堀江 正朗

久しぶり飲めば胃に落ちつかぬ酒

出雲市

園山 多賀子

金縁の眼鏡の奥にある不信

和歌山市

時田 誠一

青春へ開かぬドアを押すよつて

唐津市

桑原 掬治

日当りのよい場所風もよく当る

大阪市

藤森 小雅子

グラビヤの花に狂いし四季の貌

京都市

山本 規不風

独身へ見切りをつけた日の焦り

兵庫県

奥野 テル

父厳と慈眼に同意ほのめかし

和歌山市

内芝 としよ

巢立たれていたわり合える夫婦となり

小松市

馬場 魚山

春の青見たさに雪を取り除き

倉吉市

田民 碧水

降る雪に別れの汽車は薄れゆく

東予市

小山 悠泉

グランドの雪選抜へもう始動

島根県

大野 酔夢

贈賄が盛られた皿に民の怒気

唐津市

浜本 義美

日本中道は飲むとこ食べるとこ

大阪市

欄 蘭

省エネへ浮浪者関係ない焚火

岡山県

岩道 博友

主役から降ろされ寒道独り去ぬ

鳥取県

和井 観洋

一プラス一が五に成る石油算

八戸市 小泉 紫峰
老らくのはのかな思慕に宿の下駄

鳥取県 羽津川 公乃
省エネの知恵が家計の足しになり

宝塚市 吉田 笑女
リヤカーで老婆が春を売りに来る

竹原市 古谷 節夫
退院へ試運転する酒をくみ

出雲市 高橋 可保留
晩酌の機嫌炬燵は独り占め

米子市 青戸 美佐
老いてなお紅つける日の心浮き

米子市 雑賀 美世
旅帰り家の寝床の暖かさ

米子市 石垣 花子
除口へ開き直れる年の数

奈良市 森田 カズエ
男女の差夫婦茶碗に見せられる

岡山県 出原 敬一
追越し禁消えない文字と冬の雨

八戸市 島田 昭治
吹雪く日の逢引あの頃若かった

浜田市 佐々木 裕
機嫌良い姑は仏壇忘れ勝ち

大阪市 小谷 清女
責任を果して背骨伸ばす宿

岸和田市 古野 ひで
風の向き許り気にするふしあわせ

山口県 高崎 雀声
値上りに料理のはしり捨てられず

唐津市 田口 虹汀
その歳になればその句の味を知る

青森県 五十嵐 操史
貧乏のなかに笑顔を育てあげ

出雲市 高見 鐘堂

島根県 飯塚 虎秋
話聞いただけで名産つばをのむ

七十八の命励ますレントゲン

ふと過去の未練へ心ゆきぶられ

ふと淋し人の心の裏に触れ

とんとんとん肩叩かれて親を知る

常識にうとくて中心より外れ

新春の酒喜怒哀楽がみんな溶け

聖書抱いて神に召されて逝きませる

頼杖の思索政治に縁遠く

荏苒と行けるしあわせジャパニーズ

無風帯のわが家で心の鎧脱ぐ

雨霽れて隣村まで跨ぐ虹

偽証から馬脚現わす黒い霧

ひとり旅士鈴乾いた音で鳴る

国境はやつぱりあった金メダル

ブードルの退化よ自我が探せない

横町の鯛泳がせる活づくり

情報スパイ防衛庁にとくろ巻き

木村 はじめ
どう見てもこの世は欲と二人連れ

東大阪市 竹中 綾女
風邪ごもり嫁と娘に世話を掛け

羽島市 伊藤 静枝
終演のピエロに涙をそっと拭き

和歌山市 坂口 公子
飛行機が忍びの術で星屋行く

西宮市 朝山 千世子
値上げの世無駄をはぶけば怖くない

貝塚市 行天 千代
星の砂孫の土産はよろこばれ

広島県 砂田 静佳
孫の守御無理ですよと神経痛

大阪市 横地 雅風
日本語の発掘川柳に打つつける

宮嶋市 野口 佳愁
病み臥していつまで長い夜である

枚方市 藤本 阿蘇美
振り向かず返事する娘に子は育ち

今治市 渡辺 南奉
僕の血でいいかと友へ血を献じ

米子市 林 瑞枝
シンテレラマンションでひとりの人を待つ

京都市 山本 桐下
掃除婦の瞳を安らげて桜散る

大阪市 江城 修史
饒舌の言葉貧しき女たち

神戸市 来住 タカ子
哀しみは私だけのこと空深し

富田林市 板尾 岳人
雪景色やがて母呼ぶ声がする

☆ 投句先

下560 豊中市中桜塚三丁目13-15
桶高薫風宛(ハカギに三句以内)

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

小野克枝

過去はどうあれ善人と云うマスク

大道美乙女

人間誰しも触れられたくない過去のひとつやふたつはあるものです。肝心なのは現在の己の生きる姿勢ではないでしょうか。振り向かずに進進しようとする善人の意気込みに心打られました。

回転木馬昨日と同じとこを回い

渡辺 南春

むかし地球は広く美しいものでした。工場騒音も車が道路を独占することもありませんでした。回転木馬に乗せられた人間が無事生き伸びる手段として飽かずひるます同じ道を歩き続けることが賢明な生き方かも知れないと示唆しているのです。

ひっそりと女ごころへ積る雪

シャッターを下して私の灯をともし

桑田 静子

純粹なお心の持主と推察致します。二句と

もにひそやかな女心をうたった佳句です。句の底を流れる抒情に何ともいえない魅力を感じました。

せち辛さやさしい言葉蓄える

園山多賀子

野菜の異常高値が台所を恐怖におとし入れています。白菜、キャベツ、レタス、キュウリ、何ともお話にならない狂乱値段なのです。暮れから正月にかけての「数の子」に見せた消費者の拒否反応はボロもつけを企んだ水産会社、商社筋に熱いあついお灸をすえたことになり痛快でしたが、白菜やキャベツを買わずに生活するのは無理のよです。せち辛い世ではあります。常にやさしい言葉を持ち合える理想の夫婦像を見せていただきました。

冬木立春を信じるたしかな芽

藤森小雅子

空は明るさを増し木の芽もお喋りを始めました。やがて野山に花々が咲き競うことでしょう。作者の「春を信じる」と云う言葉に命の躍動を感じます。

けたの違う話を妻のさりげなし

木村はじめ

賢明なそれでいて内助の妻なのです。小さなことによくよくしない頼母しい女性を見てくださいました。

入口も出口も痛む年になり

福富 隆子

川柳ならばこそ吐ける言葉なのです。幻想や偏見を持たない作者の作句態度には頭が下ります。健康に対する警告の句ともれま

よ。

神仏へ合す掌内助へも合せ

麻野 幽玄

信頼しきつた御夫婦の姿がそこにあります。神仏へ掌を合せると同時に妻の労苦へ感謝することも忘れない素晴らしい旦那様なのです。

ありがたう夕焼空に呼びかける

越村 桔梢

平凡な言葉の中に真実があります。「ありがたう」美しい響きですね。

歌手の宮城まり子さんの唄「ガード下の靴磨き」が大好きで折にふれては口ずさんでいる私ですが何年か前に読んだことのある記事を思い出しました。それは、まり子さんが身障者の施設「ねむの木学園」を作るきっかけについて語ったことなのですが。

「私は私の幸せが有難くて健康が有難くて好きなのを好きな時に口に運べる幸せが勿体なくてその幸せを一人占めすることが出来なかつたのです。」と云うようなことだつたと思います。一日の終りを告げる真赤な夕陽、外国人から見れば「働き中毒」の日本人が奇異にうつるのかも知れませんが働ける幸せがあればこそ落日も光り輝いて見えるのです。

八十五の倅せ畑耕つ鍛たしか

串田句味地

お齡を感じさせない力強い句です。いくつになっても倅せな気持を忘れずに躰躍としてお暮しの御様子どうぞいつまでも頑張って下さい。私の祖父は九十七歳で毎日、新聞に目を通しコップ一ぱいのお酒を楽しんでいます。

旅

2 題

鈍行札讀

戸田古方

私の句帳をひっくり返してのこの柳文一席

鈍行とは通勤列車というか、用達し列車というか、地方の人のための各駅停車。

「ぼつりぼつり根よっローカル列車着く」

袖にされながらも、幹線にだってカタコト動いている。某月某日、鈍行と路線バスで丹

後半島を一周して来た。

丹後に入ってすぐのどこかの駅で、

「待ち合わせ鈍行鈍虫ないてくる」

つい先頃「待ち合わせ鈍行へ虫ないてくる」と「虫」の題で作っていたが、「鈍虫」と

はつきり入れられて、いっそう嬉しい句になった。

こんな句もつくったことがある。

「駅裏に見る人もなし月見草」

そんなところで急行や特急は停らないし、

急行や特急の停車時間では、月見草も芒も曼珠沙華も見えたものではない。

「あべこべはほんとにほんととします」

「しんどい」のも「あべこべ」も私からい

うと鈍行でなく、急行・特急の方である。鈍

行なればこそ、わずかに残った旅の本当の味のぞかせてくれる。

「あんな人もあつた旅でない新幹線」

「早よいかんあかんなだけ新幹線」

「早よいつてしようむないこととしてはった」

「坐席まで用意してて乗り遅れ」

坐席の心配しないで、呼吸するように人は乗ったり降りたりしてくれる。時には自分

らだけ、ひとり旅なら一人きりにさえしてくれ、客車一輛借切ったような気にもなれるのが鈍行である。

セット旅行とか、エック旅行というか、鐘

や太鼓で「デイスカバア・ジャパン」、「一枚のキップから」とはやっているのに逆らうつ

もりはないが、もう一寸、かくれたよいつころの沢山ある鈍行旅行のすすめがあつてもと

思ふ。

鈍行はなるほど文字通り時間がかかる。急

行や特急に追いぬかれる待合せ、単線のところでは三十分以上待たされるのも珍しくはな

い。それで、

「早出よりもつと早出のおつた駅」

「初発まだ駅の大扉が開けきらず」

旅は早寝・早起きが原則、それが古来の旅の心でもあつた。

「スケジュールそんな時間でいけまっか」

そんな時間で行けるようにすればよい。寡

欲こそ最良の人生。

「逆わず旅を素直に切り上げる」

ぐつとフラン減して日帰りらしうなり」

各駅停車は短距離、中距離で、通しの鈍行

はめつたにない。だが、乗換えの時間まちに

駅前の散歩ぐらいはできる。町の空気にもし

物よつと思えばふれられる。思わぬ掘り出し

物とめぐり合えるのもこんな時である。国鉄

の時間はきつちりしているから、安心してゆ

っくりからだを休められるもする。よく停ると

いうが、走りずめに走っているから、くたび

れもひどくない。適当に止まるので、その間

に小休止ができる。鈍行冥加の一つである。

「各駅停車こんどはニヌキ買つつもり」

関東の高崎線で「だんべい」ことばと話を

したことがあつた。

「旅にきて土の臭いのすることは」

「方言がまた変りだす暑い旅」

都会の旅人の顔を見ることの少ないのも鈍行

「各停のこんどは老婆の轆を読む」

「病院へいくねんこと乗り合せ」

「前の人の輪考えてたら急停車」

「渥美清の喜劇「急行列車」をテレビを見た。

急行の専務車掌は大へん。スリにかかわつた

り、お産の世話までさせられていた。鈍行だ

つて、運び屋というか、便利飛脚の手先をいとも手軽るに心安くしているのに出逢つたりする。

赤字線車掌買物まで配り

また、時には、こんなロマンスも

網棚へ手を借したげてからのこと

そこまでいかずとも

ひとり旅にしたいとてくれなれない連ができ

鈍行なればこそである

丹精とは根の心まで知りつくし

地理や歴史の勉強をするだけが旅ではなからうが、思わぬところで、思わぬものにお目

にかかれたりもする。

山陽本線のある小さな駅で急行待ちをして

いた間、プラットにおりて、歩いていたら、

陸橋の柱に錚物で「鉄道院」の文字が読めた。

いつから残っていたものかなあと、とてもな

つかしくながめられた。

人は自由を求めて旅に出る。旅は自由でなければならぬ。ふらり、気ままに好きなよ

旅のつれづれ

羽原 静歩

- 1 クリスマス二度も迎える佳き日なり
- 2 時差呆けの夜明けそれでも眠られず
- 3 五歳の坊や元気に起きてくる

- 4 夜明けかな素晴らしきかなハワイとは
- 5 雲海の又雲海の夜明けかな
- 6 着きましたここはオフアケアのターミナル
- 7 幸せはレイとタラスの祝福と
- 8 うれしがりやたらカメラの方に向き
- 9 ビショップの博物館は火山岩
- 10 そよそよとモンキーポケットに風があり
- 11 カメハメハ舌かみそうな像が建ち
- 12 ハワイまで妬きに来ましたハネムーン
- 13 ハプニング女が男なぐつとり
- 14 ベレー帽しつかりおさえてヌアヌパリー
- 15 思い出のベンチボールの丘にたち
- 16 絵葉書とルービイタイを買いあさり
- 17 かくしとく色紙二枚を書いてくれ
- 18 パールハーバーこんな所もありました

一分間の柳論

吉岡美房

私は川柳塔の一分間の柳論を読むのが好きである。私のように柳歴だけは永いがまったく川柳らしい川柳のつくれない者にとつて柳論などおこがましい限りであるが、大体川柳塔の一分間の柳論に出ている方々の御意見を拝見すると大部分が誰にでもわかるユーモアのある句をつくらうという方々が多いのではないかと思われる。勉強不足でいわゆる新しい川柳のまったくわからない私にとつてはうれしく拝見させて頂いているし、今後もあり

ふれた言葉でありふれた表現でしか私は川柳はつくれないだろうと思つている。私は私なりにそれでもいいのではないかと考えている。ただ今後の目標としては個性のある句を作つていきたいものだと思つている。最後に川柳塔にも革新の句でなくてはいけない、詩川柳の方向に脱皮しなくては川柳の発展はないと思われの方々も多数居られると思うが、そのような方々の御意見もこの欄で拝見させて頂きたいものだと思つている。

- 19 アリゾナもサラトガも遠い昔なり
- 20 小半日遊ぶインドネシアの国楽し
- 21 火の舞いへやんややんやの拍手する
- 22 ミネアポポリッシュポント夕日がとてもきれいな
- 23 ワイキキのうす紫に朝焼ける
- 24 爆竹が鳴つて年末近うなり
- 25 ふり向けばここはホノルル美術館
- 26 ベニバナの肉も野菜もリズムカル
- 27 トランクにこうまで詰める旅の夜
- 28 しめこんだ鍵へあたふた廊下の瞳
- 29 デュティフリーこんなにあい品もあり
- 30 買いあさるデュティフリーの瞳が忙し
- 31 思い出よさらばホノルルの空が晴れ
- 32 虹の橋架けて旅路の終りなり

ベスト10・前列左から寿子・花梢・好郎会長
満津子・道子・後列左から武雄・柳志・千代
・百酒・和子諸氏



春をよびこむ

第27回 大萬川柳大会

55年2月24日
会場・大萬

司会

柳話

昭和五十四年度ベストテン表彰

特別課題
兼題

西田 柳宏子
若本 多久志
西尾 栞

「激励」 主幹代選 極高 薫風選
「感激」 島居 百酒選
「正面」 満津子代選 菊沢小松園選
「余熱」 松原 寿子選
「拝む」 神夏磯道子選
「突然」 八木 千代選
「すれすれ」 本多 柳志選
菊沢 小松園

閉会の辞

ベストテンご招待懇親宴

×

すっかり元氣になられた若本多久志氏の開会の辞は好評だった。(翌日電話で開会の辞をほめて来た人があった) これまでの梅里さんの路郎選ではほとんど第一位の成績だったことなど克明に調べたもので、梅里さんが路郎選に賭けたなみなみならぬ意欲のほどを開会のことばに盛りあげられた。

多久志氏のお話がすんだところで、本年初出席の方々の紹介があった、昨年ご夫君を亡くされた米子の八木千代さんが元氣に出席。水煙抄でおなじみの桑原伊都、青戸美佐、菅井未知、野坂なみ、雑賀美世のみなさんと共に会場に花を咲かせてくださった。

西尾栞氏の柳話は、大萬川柳の初代選者は路郎先生、二代目は白柳氏、そして現在の好郎氏が三代目。三代目といえはとやかや云われるものだが大萬川柳選者の三代目は抜群の熱意で今日の隆盛を勝ち得たと、好郎氏をへたほめの栞氏だった。

金婚と喜寿を記念した句集「遍歴」の見事な出来ばえ、この上はうんと長生きしてもらってますます柳界に貢献していただきたい。と、長寿の話になったところで、氏と同業のグリの会長江崎利一翁の九十九歳(白寿)のお祝いから本年一月に死去されたとき「一粒大なる葬儀の模様など語られ、とくに「一粒三百メートル」のキャッチ・フレーズが生まれたくんだりとは興味深かった。(記者註・この

「寒いなア」
「すぐ春が来るよ」
「すぐに?」
「大萬川柳大会が今日にも春を連れてくるさ」
「会場の大広間に、故梅里さんの麗筆をのびす松江克美氏の筆跡があざやか。」

標語は故岸本水府先生の作で教科書にも載つた。江崎翁は生々庵主幹と同郷の佐賀県人だとのこと、これは初耳である。

今日の選者のほとんどが女性であることから、本年米寿の麻生霞乃先生の名句集「福寿草」へ話が飛ぶ。

福寿草松にしたがいそろかしこ

ほか代表句が紹介され、同句集の序文、路郎先生の名文を朗読された。

会場右端にさん然と輝く金色のトロロワイエが林立している。まず敢闘賞の小雅子氏から順に、ベストテンの百酒（白宗）氏まで、好郎会長からトロロワイエが授与される。

「今回は路郎賞の松原寿子さんがベストテン入りしてくれた」と、氏もうれしそうであつた。

兼題「正面」は本間満津子さんが目が不自由のため、小松園氏が代選。また特別課題の生々庵主幹が欠席されたので、「激励」は薫風氏が代選されて、主幹からの祝辞のメッセーじも薫風氏から伝えられた。

閉会の辞は80年代も菊沢小松園氏である。いつもご苦労さまです。和やかな中にも、厳しさのある第27回大萬川柳大会は興奮の余熱を残して川柳塔演技陣出演の場へ移される。

(不二田一三夫)

★

披露が終わると会場はテキパキと宴席に変わりベスト10招待懇親宴である。形水さんの音頭で乾杯。まず真打ちがトップに登場、瓢太さんの奇術で幕があく。

こども女性軍が大活躍。満津子、道子さんのコンビで「花笠音頭」、アンコールに応えて満津子さんの「おてもやん」は大喝采だ。寿子さんの「安来節」には用件で帰られた柳宏子さんの踊りが見られなかったのが残念。風邪気味という千代さんが洪い「さのさ」を

ご披露。米子の五人衆（美佐、伊都、なみ、未知、美世）に千代さん、それに鳥取出身の道子さんが加わった「貝殻節」に会場声あり。まるで山陰路を旅してみたいだ。

男性軍も負けてはいない。一二三、酔々さんが民謡、ナツメロで大奮闘。鎮彦さんが「古城」、「悲しき酒」を絶唱。いちいち書いてはキリがない。唄の合間にベスト10の記念撮影もこの雰囲気では名カメラマン岳人氏もなかなかシャッターが押せぬ。

百酒さん貴録の「男なら」がトリ。柳志さんの方才三唱で名残惜しくもおひらきとなる。司会の鬼遊さん、ご苦労さまでした。

(ベン・谷垣史好・カメラ・板尾岳人)

★

特別課題「激励」

激励の手紙は十円貼り足して
激励の母の笑顔よバラの恋
激励のつもり古老の回顧談
激励を背い背広で聞いている

兼題「感激」

感激の喋ったことをもう忘れ
感激の涙で明日の虹を描く
感激が醒めて受賞の重み知る
感激のない青春で漫画読む

兼題「正面」 菊沢小松園選

正面の主役が一番先に酔い 桐下

膝詰で説けば答も涙持つ 美世

北風をまともに父として生きる 一二三

うしろ正面神も仏も待っている

兼題「余熱」 松原 寿子選

星クスガクロス余熱にして残り 柳選

大喧嘩した盃にある余熱 晴風

螢火に恋の余熱がすこしある 酔々

余熱抱く涙真珠の毬となる

兼題「拌む」 神夏幾道子選

拌む手を開けば自我が顔を出す 千代香

都市砂漠拌む心は汚されず 弥生

身障児母満願もなく拌み 好郎

拌んだら罪が少しは消えそうで

兼題「気楽」 藤岡 花梢選

河内野の隅で気楽な六地藏 酔々

本当のことを知らないから気楽 史好

炭焼きの煙り気楽に見えてくる 水客

こつそりと気楽に咲ける野辺の花

兼題「突然」 八木 千代選

突然の鳴動椿ふるえ咲く 千代三

昔のことを突然い出すのも女 史好

突然に思想が変る敗戦日 道子

だしぬけの愛を發車の窓越しに

兼題「すれすれ」 本多 柳志選

すれすれに帰って何喰わぬ顔 和子

すれすれに生きる男のちびた靴 雀踊子

すれすれを六法全書から探し 好郎

もう一寸見たいところをコーナーシヤル

新 顔

西村早苗 選

新顔の美人ナースのもてっぶり
秀才と聞く新顔の目鼻立ち
新顔に地盤くわれてくるあせり
新顔がやがてライバル意識抱く
新顔が社則へ遠慮ない意見
新顔の発言痛いとこをつき
ニューフェース会えば普通の人であり
新顔の世辞がグラスに透いて見え
子のような上司新顔かしまり
新顔の土産は故郷の母に買う
新顔の先生に恐いPTA
新顔マダム寡婦だと知れてからはやり
新顔にうだつ上らぬまま越され
新顔の髭が課長の気にさわり
挺身の決意新顔から訓られ
童顔のこれから馴染む社のバッジ
新顔の猿はとことんいじめられ
新顔へ窓際族の眼が温い
新顔がお目当てグラス乾しながら
新顔の墓が一段上に建ち
新顔もチラホラ議会の新鮮味
新顔の集金不安な目で見られ
みんな新顔コネのあるのが一人居る
新顔で並ぶとみんな燃えてる眼

新顔へひとつびっくりさせて置く
先輩面のへま新顔に笑われる
ハンサムの新顔風当りが強い
新顔へからかうだけの客がより
神妙に新顔目配り怠らざ
大き様に新顔おだててみたろうか
ニューフェース売れ紐さんの眼が怖い
新顔にもう常連の瞳が動き
新顔がエリート下積み妬いている
売り上げのグラフ新顔とは見えず
先輩の誤算新顔腕がたち
新顔に味方と欲しいのが一人
新顔だねとおとくいのが一人
新顔に指名が多いシャンテリア
新顔の男の靴がよく光る
偉そうに見える新顔組に来る
新顔に居心地悪い椅子の場所
多彩なる新顔未婚の母も居る
腰軽るい新顔うまく使われる
新顔へ善導惜しみなく与え
そのひと言新顔心まで許す
新顔が天位の楯に顔を埋め
新顔の仮面ピエロの儘で居る
新顔がペンの重さに耐える日も
新顔の癖をさがして突いてみる
新入社見上げるエリートの岩
新顔の人柄光るものを持ち

明 朗
武 水
友 大
不 二
可 保 留
古 方
ど ん た く
一 進
洋 々
千 代 香
一 路
里 風
耕 草
登 美 也
メ 女
木 魚
芙 佐 子
右 近
寿 美
博 友
茶 人
ゆ う 也
洛 醉
彩 平
三 和
は じ め
方 言 の ス ピ ー チ 左 遷 の 村 で 聞 く
ス ピ ー チ が う ま い 割 に は 出 世 せ ず
ラ イ バ ル を 送 る ス ピ ー チ 芝 居 め き
ス ピ ー チ の 花 嫁 み ん な 秀 才 で
通 訳 の い る ス ピ ー チ が 時 間 と
良 妻 へ 押 上 げ ら れ る ス ピ ー チ
毒 舌 の ス ピ ー チ あ ら り の 耳 を 搦 る
ス ピ ー チ の 原 稿 誤 字 の ま ま を 読 む
自 画 自 讃 と 云 う ス ピ ー チ の 聞 き づ ら さ
ア ド リ プ に な っ て ス ピ ー チ 盛 り 上 り
唇 が 薄 く ス ピ ー チ 得 意 な り
ス ピ ー チ の 原 稿 何 処 か で 狂 い だ し
宴 席 の ス ピ ー チ 誰 も 聞 い て な い
こ の 辺 で も う い い ス ピ ー チ ま だ 続 く
ス ピ ー チ は 代 理 の 方 が う ま っ た
ス ピ ー チ 高 調 軒 も 高 調
口 下 手 の ス ピ ー チ も い て 気 が ほ ぐ れ
ス ピ ー チ の 眼 鏡 け け たり 外 し たり
口 こ も る ス ピ ー チ 恩 師 の 絵 入 歯
ス ピ ー チ だ ん だ ん 真 実 に ふ れ て 来 る
結 婚 の ス ピ ー チ 祝 文 の 如 く 聞 き
ス ピ ー チ を 主 賓 は う わ の 空 で 聞 き
ス ピ ー チ 馴 れ も う こ み あ げ る も の が な い

ス ピ ー チ

上田翠光 選

千代香
寿美
胡頼子
多賀子
登美也
優
榮
洋々
七面山
大柏
本蔭棒
雀声
枯梢
洛醉
白李
どんたく
夢酔
隆子
可保留
不二
越子
素身郎
佳雲

吟 題 課

親友のスピーチ痛いところをつき
 スピーチは自分を裸にする男
 スピーチは主婦の里の口訛り
 スピーチは苦手で歌も外れがち
 スピーチで仲人さんの嘘がばれ
 ここまでは前置らしく水を飲み
 スピーチを柳人らしく句で結び
 齒が抜けたところからスピーチが逃げ
 スピーチに詰ってにがいお茶を飲む
 スピーチはしびれる足に気付かない
 なれ染めをあかせてスピーチ盛り上げる
 笑わせて泣かせて料理忘れさせ
 リハサルの時はスピーチうまく言え
 稽古したテンプルスピーチだったのに

住 佳

スピーチも職階順に立上り
 スピーチへ禁句あわててのみくだし
 短いスピーチの方が心に残ってる
 中のある智識スピーチ生きて来る
 スピーチに飽きてた拍手かも知れぬ
 スピーチの長さ耐えている正座
 スピーチが隣まで来て唾をのみ
 琴線にふれてスピーチ隙がない
 引出ばい今日のスピーチこれにしよう
 スピーチの一句が見事締めくくり

人

ライバルのスピーチ負けたなと思っ
 花嫁は平気スピーチあがり気味
 スピーチに見事な嘘がのべられる

天 地

花嫁は平気スピーチあがり気味
 スピーチに見事な嘘がのべられる

花子 凡九郎 耕草 保夫 文月 竹馬 可住 掬治 三和 朝子 悠泉 悠明 方大 カズエ 綾女 春人 茶日 大柏 一路 古方 宵明 里風 木魚 一路

スピーチの手練は人を動かさず

良 心

不二田一三夫 選

良心の蓄に善意の花も咲く
 寂光に心の奥を当てて見る
 良心をハテナと思う世界地図
 良心と野心本当の僕はどれ
 良心の呵責ワンカップで消そか
 良心の苗代欲しい世相なり
 永田町良心の灯がからみ合い
 良心が持つて帰えれとゴミ袋
 良心がソロバンの珠一つ下げ
 良心に相談している猪口の底
 良心に恥じぬと悪玉うそぶけり
 良心を貫く日日の神話聴く
 交番に児の良心が届けられ
 良心の仮面がすこしずれている
 振りかえれば孤独になっている良心
 良心と共にお国も売り飛ばし
 良心を信じて社会の枠に住み
 良心をお金で売って仮面買え
 良心の命ずるまんま貧に耐え
 裏切った日は良心も酔いつぶれ
 良心という同じ釜の飯を食う

多賀子 榎梢 南奉 洋々 哲夫 隆子 木魚 本蔭棒 大柏 春日 句味地 胡顔子 千代香 保夫 久仁於 掬治 天

良心の留守ねらつてる小悪魔
 良心へ軌道修正レール敷き
 良心が弱い心も連れてくる
 筆ペンの写経に良心のぞかれる
 良心をシルバースhirtに聞いてみる
 悪い事したなと思う中は無事
 判断がつけば右なと左なと
 梯子酒何処かで良心置き忘れ
 良心が青の洞門世に残し
 良心に鞭打ってきた回り道
 良心がこころ尻尾を振らせない
 雑兵の良心脆く票を売る
 良心を引き出す仏陀の瞳がやさし
 良心の隣りに住んでいる虚像

ゆう也 秀峰 可住 富志子 勝美 虹美 同 義美 桐路 一 下 彩平 方大 宵明 規不風 不二 越方 古方 どんたく 凡九郎 久仁於 里風

良心に催眠術をかけたまま
 獄窓に塵紙の鶴 残るまま
 豆球にすると良心疼きだす
 ▼おこわり吉田圭井堂氏のご都合で不二田一三天が代選しました。

裕 阿蘇美

風に寝て妻の一日耳で追う

同

(風邪に臥し妻の一日耳で追う)

未知

追いつかれ抜かれて短針欲が無い
追求に勝てず我身の罪を断ち

同

(追求に負けてさんげの気が目覚め)

寿子

余韻追う傘の雫を切りながら
祈る掌の中で奇蹟を追い続ける

同

背の余韻追うて別れを辛くする

同

(声の余韻追えば別れが辛くなる)

同

未来追う利那を舞うてシャボン玉

同

(消えはてる利那を追うてシャボン玉)

昭和

逝きし女淋しくなれば影を追う

同

(淋しさに逝つた女の影を追う)

八文銭

泣きながら母追いかけるけなげなき

同

花追うてロマン求めて旅続く

幸

(旅続く花のロマンを追いかめ)

同

臆病で追うことなどを考えぬ

同

(とてもとても追うなんてと小心者)

同

川柳塔社常任理事会 (3月3日)

きょうはひな祭り。およそヒナ祭りには縁
遠い人たちの顔ぶれだが、それでもみんなニ
コニコいつも坐わるとこへ席をとる。まず正
面、床の間を背にして生々庵主幹、その前方
の左端に栞氏、右端に好郎氏、左側は形水、
小松園、太茂津氏、右側は紫香、潮花、萬的
氏、主幹と向い合つて末席に一三夫、その横
に今夜は与呂志、岳人氏というヒゲ面のおヒ

追うほどににくやあの人点となる

茂美

忘れもの振りかざしつ追いかける

同

(振りかざし忘れものよが追いかける)

露杖

まだ夢を追う六十の友なむ

同

(かくしやくと六十路の夢を追う友で)

同

ビーボの余韻凍夜の床に追う

同

(ビーボの音が尾を曳く夜が凍る)

紀久子

男の目追われたくない追われたたい

同

(異性の目に追われたくなくし追われたく)

同

ローンに追われてるとは見えぬ門構え

同

追う夢と追われる日日にあるギャップ

同

波を追う少女波にゆらされる

同

(波を追う少女へ波が笑み返えず)

大鷹

つかまらぬ夢を追うて六十年

同

(夢追えど追えどつかめず六十年)

同

牛追うた河原に友も草も消え

同

追っている牛のリズムで日が暮れる

同

追うてはまた追うて追いかける

同

(牛追いのリズムさわやか夕映える)

同

追い抜けはまた追うて追いかける

同

(長針の宿命追いかけて追いかける)

同

ナさまがならば、楼上の会議室は省エネでは

同

ないが暖いのでストーブはおやすみ

同

まず一三夫からもろの報告があつて、

同

きょうは「耳の日」でもあるが、ちよつと耳痛

同

い報告がある。

同

印刷費の値上げである。今日の物価高だか

同

ら当然のことだろうが、耳も頭も痛いことで

同

好郎氏の会計報告も一喜一憂、ご苦労さま

同

追い出してサテと妻にもある予定

三男

追うものが無いから老化がビッチ上げ

同

追ってくる児へ母も泣く園の門

伊都

追い風に乗って運よくホームラン

同

(ホームラン追い風さまに貰いうけ)

同

侵略の鬼豆ぐらいでは追えぬ

同

ライバルを追うとき三角な目となり

同

SLの夢8ミリが追いかける

同

追い越せぬ竜で人生固く生き

同

五十妻針追う糸に似てあわれ

同

天秤にかけて窮地に追いこまれ

同

ライバルを追いかけて爪を研いでいる

同

日銭追う財布苦節の汗がしみ

同

新薬を追いかけて夢よもう一度

同

追加酒にとつと本音吐かされる

同

題 立場——4月20日締切(6月号発表)

同

宛先 千七一一 岡山県倉敷市下津井

同

本 田 惠二朗

一—九—三四

同人が一人ずつ読者をふやしていただけ
と簡単に解消できる問題だが、一人が一人ふ
やすということはなかなかどうして大変なこ
とである。この10月ごろには郵送料も大幅な
値上げになるらしい。
本年の路郎忌には番傘の岸本吟一主幹が、
水府忌には中島生々庵主幹が交流選者と決定
出席一生々庵・紫香・潮花・太茂津・栞・
形水・萬的・与呂志・好郎・小松園・岳人・
一三夫(敬称略)

大 萬 川 柳

「特別」 入選発表

選者 川村好郎

投句総数 四百十二句
入選 六十七句

身障児へ特別でよし母の愛

鳥取 静 泉
特製のケーキに愛が満ち溢れ

特別とあるチラシにいつも騙される

真面 一本杉
目でものを言う特別な間柄

特別機平和の彼岸へ飛びつづけ

羽曳野 吐 来
心臓みな特別製の議員席

特別ご招待その商魂にくすぐられ

和歌山 寿 子
特別なコース二人の視野にある

特別料理七面鳥がしゃべりだす

和歌山 紀久子
行列を尻目に入る紹介状

指先の特技刑事に尾行され

和歌山 和 子
特別に夕陽がきれい嬉しい日

特別扱いですれば反抗期又すねる

和歌山 和 子
特別な視線咄嗟に瞳を伏せる

特別席代理の尻が落ちつかず

大阪 文 秋
特別に誂えたのよと言いつらし

特別なメニューはなにもない長寿

兵庫 テル
七光り特別席がまばゆくて

特別の背後説けば札の束

米子 瑞 枝
日も決まり娘へ特調のお茶お花

特別な椅子です尻のある匂い

倉敷 春日 日
スベツシャルサービスなどと客を引き

特別な事なく今宵も湯に浸る

奈良 保 夫

特別の手当中味は知れている

富田 林 優

特別のおしゃれ鏡に励まされ

名古屋 曲ん手

ハネムーン特別休暇を羨まれ

倉敷 三林坊

特別の配慮にあつたおとし穴

米子 久 馬

バーゲンのキズを見つけて又引かせ

守口 右 近

幼な児の特別席は母の膝

大阪 道 子

薬にでも縫る特別祈禱料

尼崎 千 子

特別に優しい妻の下心

大阪 ますえ

仏壇も特別セール彼岸前

大阪 秀 村

特別の大安売りへ乗ってこず

大阪 弘 生

特別の心を込める毛糸針

米子 伊 都

これからの後は特別観相料

八尾 美 幸

特別を願う心が媚になる

今治 南 奉

特別な配慮はご免母子家庭

橋本 木 魚

特別に社長が早い社の空気が

和歌山 正 博

特別な人へ開いた裏の門

今治 胡 頼子

ホワンホワン特命受けてお越し入れ

鳥取 洋 々

父の日の父へジョニ黒封を切り

大阪 武 太

火葬場にも特別のランクある

尾鷲 伊津志

荒れた掌が特級酒飲む嬉しい日

奈良 本 蔭 棒

招かれた特別席が高くつき

藤井寺 吸 江

あなたには特別ですよと思に着せ

特売場きのう来た手がかき廻し

和歌山 武 雄

御利益の特配ねだる祈禱料

特別の伸と合鍵知っている

熊本 芳 仙

肩書が居留守の奥へ通される

君にだけ話すへだまされそうなる

米子 雄 々

特別な伸と女の勤で知り

特別な好意に気付き隙みせず

京都 桐 下

同じ茶が特別うまい嬉しい日

特別という可愛さを持つ娘婿

桜井 雀 踊子

特別に目をかけ恩は売ってある
特別の仲だと覗く万華鏡

七光り特別な目がつきまとい
特別の期待に鬼となるしこき

佳句

和歌山 寿子
特別に貴方へかける橋がある
和歌山 公子

特別にかばってほしいのも女
和歌山 としよ

特別の波長があつて夫婦です
東広島 鬼 焼

特別なりボンで笑顔のありつたけ

西宮 百酒
特進の椅子の下から風が刺す
人ノ句

富田林 花 梢
特別のもてなしどころも気が疲れ
地ノ句

大阪 弘生
二階級特進遺影笑つてる
天ノ句

大阪 好一
特別といふはからいのない寿命
選者吟

特ダネを他社に取られた記者だまり

昭和五十五年

一 武雄
二 右近
三 花梢
四 寿子
五 弘生
六 道子
七 好一
八 和子
九 小雅子
一〇 智子
一一 洋々

一三 優

三、五 富田林
以下略

昭和三十五年

一交 替 三句以内
締切四月二十五日

第六回
「本気」
締切 五月二十五日

投句先

干凜 堺市堀上緑町一三二七
藤井二三三

大萬川 柳係

54年度各地柳壇賞

梅原憲祐氏に決定

若本多久志

今年もいつものように編集部から、佳句地
10選、百二十句が送られてきた。もちろん全
部無記名なので、どなたの作品が最終選11句
に残るか、たのしい選をさせてもらつた。こ
健吟を祈ります。(54年4月号、55年3月号)
54年度の入選作は

空論とけなす上司に策もなし
母になる決意で何もこわくない
靴音の軽さに人の幸を聞く
もう少し生きるつもりで辞書を買
川村 好郎
かたつむり恋にしあらば急ぐべし
高杉 鬼遊

「各地柳壇賞」が出来てから、句の向上が
著しいと好評である。
句を通報される幹事の方も、策戦を練り、
なるべく新傾向の句を送ってこられるよう
である。句会吟軽視は過去のものとなつた。
故須崎豆秋氏の
看板の裏で茄子の花が咲き
も句会吟である。もう55年度の「各地柳壇賞」
はG.Oの合図が出ている。(F)

佳句10篇

梅原 憲祐

▼各地柳壇賞記念品は四月七日の本社句会で
おわたしします。

★

柳界展覧

(原稿締切毎月末)

▼中島生々庵主幹は日川協理事長就任以来講演や執筆依頼が多く公私共に忙しい日が続いている。
▼第10回紋太忌・ふあうすと年間賞発表会川柳大会が4月13日(日)11時から兵庫県福祉会館で開催。題と選者／招く・安藤まさ代／満・石原伯峰／川・森中恵美子／芽・橋高薫風／歩く・堀・豊次／太い・新葉美野路／門・泉・淳夫／席辞なし・各題二句・投句拝辞。会費千円(記念品呈・懇親宴なし)。主催・ふあうすと川柳社。

百円封入(切手可)発表誌呈。飯山市戸狩・石田一郎方。
▼第11回北日本川柳大会が4月20日(日)11時から富山県社会福祉会館4階ホールで開催。題／真つ暗／スバ／毎日／うぬぼれ／倍／退屈／本社の伊藤茶仏氏が選者として出席する。投句料七百円。4月15日締切。投句先〒930富山市豊川町3の7松岡緑朗方。北日本川柳の会係。

▼きやり吟社創立60周年記念会が4月6日(日)午前11時から神田明神、神田会館で開催。題と選者／扶適・茶六／愛嬌・夢人／繁る・茶の丸／酒・源氏／数える・蓮火／鯛・圭佐／席題3題(各三句詠)。会費三千円(軽食・社人一句集・きやり八人集。壺・贈呈)。投句拝辞。パーティ会費不要。〒101千代田区神田東紺屋町二七・野村圭佑。
▼「新・川柳への招待」楠本憲吉・山村祐共著が1101千代田区猿楽町一〇一・新日賀ビル・日貿出版社から発行(定価千八百円)。現代川柳への衝撃的な提言と論考がなじみ深い古川柳を平易に評解。他

に本社関係から薫風・鬼遊・酔々・美幸・智子諸氏の五句ずつが紹介されている。必読の名著。
▼第一集「山陽短文芸」が山陽新聞社から発行。短歌・俳句・川柳の三部門に分かれていて、は二月・五月・八月・十一月が中島生々庵選の入選句である。(千二百円)〒700岡山市柳町二一―一三・山陽新聞社。
▼雑誌「川柳」三月号にインタビュー。やっぱり、穿ち・諧謔が命だね／俳人金子兜太。ほか多彩な好読みもの満載。本社関係では小林由多香・塩満敏氏の執筆・作品。「紅華」の紹介など(定価680円)〒1154世田谷区三軒茶屋二一―九・構造社出版。
▼矢谷詩純郎氏は1月23日老衰のため死去。葬儀は25日寝屋川市の玉泉院で営まれた。行年82歳。藤沢恒夫氏夫人典子さんの敬父で大陸で活躍された。戦前から川柳界に参列した。橋高薫風氏が告別式に参列した。▼一枚の会」発足句会が故岡橋宣介氏夫人菊子さん出席のもとで開催。本社から薫風、柳宏子、鬼遊、酔々、寿馬、頂留子諸氏が出席、30数名が発足を祝った。

▽同人の動向△
▼若本多久志氏(西宮市)が左きき友の会や、老人ホームへ川柳普及に熱意を示されていることを毎日新聞のハーフ・タイムへ松田道雄氏が執筆された。(2月22日朝刊)
▼川村好郎氏(高石市)と平賀紅寿氏との対談NHK。後をたのしめた。の川柳の時間は好評だった。
▼大江秋月氏(兵庫県)は国鉄退社後六年になるが町内会長などで結構忙しいとのこと。二月五日に内孫誕生。これで五人の祖父になられたとか。
▼越智一水氏(今治市)は第13回四国郵政川柳大会の雑誌選者として出席された。
▼板尾岳人氏から「森田熊生氏のお世話で山の友と鳥取へカニを食前に来ています。鳥取の駅前で由多香氏の病氣見舞の途中の河村日満氏に偶然に逢いました。」
▼辻圭水氏(堺市)から「かつての同人、友渕貴山氏が2月22日に死去されたこと報告をうけた。」
▼不二田二三夫氏作の「川柳寄席」が「上方芸能」誌に発表されているが、中尾漢介氏選「漫才」の入選句が同誌に再録された。

▽4月の句会△
▼菜の花句会は10日(木)夕六時からいつもの西郷会館で開催。題と選者／浮気・菜／信号・鬼遊／守る／幸生／合図・未定／投句料百円、締切前日到着分まで送り先大路美幸方。
▼南海電鉄川柳会は17日6時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は「縁起もの」軍歌／悪役。
▼南大阪川柳会は20日午後6時から松崎町三丁目大萬で開催。題は「感情」エネルギー／くばる／息。
▼東大阪川柳同好会は26日6時から東大阪市民館2Fで開催(近鉄水和田駅南)題は「血筋」天職／釣／めくら判／席題二題当日発表。
▼第11回奈良新聞川柳大会4月20日10時から奈良公園飛火野芝生。題／小経／信じる／うしろ／茶漬／会う。

第四回 全日本川柳大会

日時 昭和55年6月22日(日曜)

正午より

会場 岡山中央公民館

岡山市小橋町(岡山駅前から市電
東山行小橋下車旭川沿い)百米

宿題 第一部 事前投句 締切5月末日

「芸」 柴田 午朗選

「輪」 渡邊 蓮夫選

「山」 尼 緑之助選

2.5cm×21cmの句箋に単記無記名出句、封筒に住所姓号を明記して下さい。

第二部 大会当日出句 締切十三時

「時事雑詠」 大野 風柳選

「パン」 小松原爽介選

「流れ」 石原 伯峯選

「なさけ」 丸山弓削平選

表 彰 一部 二部共二句宛(未発表作品に限る)

会 費 金一、〇〇〇円(発表誌呈)

第一部出句は会費と共に送付して下さい。
第二部は当日受付(但し第一部で会費送付の方は登録のみで会費不要)

投句先

556 大阪市浪速区大国町二一六一一

日本川柳協会川柳大会係あて

右川柳大会の前日(六月二十一日)に来
岡される方には、地元柳友による誘導で倉
敷市内観光(自由行動)吉備路史蹟めぐり
のプランを用意してあります。別紙熟読下
さい。

主催 日本川柳協会

★ 日本川柳人名鑑加要領

一、名鑑原稿 所定の用紙に記入、姓雅号、
本名、生年月日、職業、所属柳社、郵
便番号、住所、電話番号、都道府県、

自選句二句、顔写真(近影、できるだ
け白黒の方がよい)

写真および記載事項で掲載を望まれな
い個所は空白でも可

二、参加費 五、〇〇〇円 名鑑一冊送
付、申込みと同時に払込み(送金は
振替、または小為替が安全確実です)

三、締切り 昭和55年5月15日

四、発 刊 昭和55年9月上旬予定

五、申込所 〒556 大阪市浪速区大国町
二丁目六二の一

日本川柳協会事業部

電話(〇六)六四九一七三二

振替は口座番号(大阪三〇二九九九)

参加用紙はご請求下されば送付いたします

第12回東洋樹川柳賞贈呈

川柳大会

第十二回東洋樹川柳賞は、大阪川柳塔
社の橋高薫風氏と決定しました。この栄
誉を称え前途を激励祝福します。意味での
通り記念大会を開催致します。各層柳人
多数のご参加を期待いたします。

日時 5月11日(日) 11時開場

会場 神戸市立福祉センター五階・婦
人会館 神戸市生田区橋通三丁
目一(湊川神社西門前)

兼題 「粘る」 (当日発表)

「反骨」 平山繁夫選

「財産」 磯野いさむ選

「刃物」 新葉美野路選

「高い」 西尾 栗選

「薫る」 去来川 巨城選

「庶民」 大森風来子選

「飾る」 小松原 爽介選

◇各題二句、欠席投句は受け付けず。

◇席題なし

講演 「私の川柳」 橋 高 薫 風

会 費 千 円(記念品呈)

賞 知事賞、市長賞ほか多数

備考 当日、昭和五十五年度・時の川柳
社作家賞入賞者の表彰を行う。

主催 時の川柳社

後援 兵庫県・県教育委員会
神戸市・市教育委員会

神戸市・市教育委員会

市場没食子・市場カネ女共著

傘寿・金婚 記念句集 『夫婦』 刊行句会

昭和55年3月7日
会場・金属会館



左から生々庵・没食子・カネ女・小石諸氏

よりないとのことで、それに本社への句集の注文が8冊。これらは句会がすむまで待ってもらっている。出席者が多すぎると句集が足りないのも複雑な気持ちだった。著者の方も送本するのを止めているそである。

世の中はよくしたもので、どうやら20冊ほど残すことが出来た。イスが足りなくてハラハラしたものだが、なんとか受けた注文数だけは確保できた。あすからの分は売り切れのおことわりするほかない。ーとは、とんだ裏ばなしをご披露してしまった。

句集刊行記念とは別に、栗氏が「日本川柳人名鑑」用の顔写真撮影に会場を走りまわっておられた。(P.55参照。一人でも多いご参加をお願いする)

さて、ペンを戻して……熱気で汗ばむ会場である。

まず没食子・カネ女ご夫妻の可愛いお孫さん三人の花束贈呈から華麗な幕があく。健二(11歳)達也(6歳)三恵子(4歳)ちゃん

から花束を受けるお二人は幸福そのものようだった。カメラのフラッシュが拍手の渦と交錯する美しい場面である。花束贈呈がすむと、本社常任理事有志ほかの金一封を小谷菜子さんからおわたしする。

会場左端に小松園氏作「此の人に歩幅合して五十年」の句が掛けられている。

ここで初出席の方々の紹介があった。番傘川柳本社の青木史呂氏ほか。会場のざわめきがおさまると、生々庵主幹の柳話になる。

ご挨拶
中島生々庵

没食子さん、カネ女さん、お芽出度ございます。没食子さんはとにかくと致しましてもカネ女さんが遠く鳥ヶ辻川柳会時代から川柳を作って居られたことは承知して居りましたが、こんど句集をお出しになるに当って、夫君没食子さんと堂々肩をならべて、おびただしい佳句を発表なさいました事に就いては、驚きもし一層お喜びにも存じました次第であります。

開場一時間前の会場受付は、本社の与呂志・天笑・文秋・敏諸氏と、没食子・カネ女ご夫妻の令息、久介・信行さんらが山と積まれた句集「夫婦」を前に大わらわである。

句会前日の天気予報では、一日ぐずつき雨とのことだった。句会の敵は雨だが、ここに救い一つあった。というのは句集が百十冊

句集の序文にも書きました通り、年齢からいうと没食子さんより二、三年兄貴でありましたが、柳歴から申せば、路郎先生の門下に入られてからも大先輩で、更に本田溪花坊氏に師事されてからいったら、実に十数年の大先輩であるのであります。それにもかかわらず謙譲な没食子さんは、再三にわたり私共夫妻に対し、「ご丁寧なお言葉で序文と題字をご委託になり、その上、万分の一でもあやかりたいとお言葉ささ下さつたのであります。そんな点をアヤかりたいとおっしゃいません。

しいて探せば私共夫妻が健康で、先年金婚に達したこと位で、何のとりえもない老朽品であるに過ぎないのであります。ただ川柳というご縁で長い間交流を頂いて居る外に人間



三人のお孫さんから花束を受ける
没食子、カネ女ご夫妻

にも親しく楽しく語り合っていたところをよく見かけて居りました。あれは全く没食子さんが人徳というか人柄というのか、川柳に打ち込んだ柳魂のせいとでも申せるものかと、私は思つて居ります。こんど句集「夫婦」が発刊されるに当りまして、私は私の平素の癖癖とでも申しましょか「夫婦」とは何かという奇妙なことが気

関係として多少のかかわりがないでもありません。

それは路郎先生の門下生としての関係の外に、医学と薬学との違いこそあれ、没食子さんは阪大の薬学部、私は医学部の出身であること、また私の同期生の尾崎方正君が大阪通信病院で医長時代に副薬局長として同君を補け路郎先生ご指導のもとに院内に烏ヶ辻川柳会を盛り育てて居られた関係で、特に親しさを感じて居りますこと、またお酒が好きで、飲めば平素の無口が大変明るくなるので気軽に話し合える楽しい時代が続いていること、云うなれば遠慮のない兄弟弟子であるわけであるのです。不思議なことに私のような、のんび兵衛というものはかりでなく、酒に弱い方正とか、潮花とか白柳とかとも、川柳を如何

になりかかって来ました。昨日まで赤の他人であった男と女とが、今日から二世も三世も誓う絆に結ばれるのが夫婦であるとするれば、私のように変なこだわりを持っては性格でなくとも、考えれば考えるほど奇妙というか、摩訶不思議というか、一口には説明できない思いに捕われるのが夫婦であると思えてなりません。それを世の中では「このたびは不思議なご縁で」と簡単に挨拶して処理して居ります。

ごく最近発売された政次満幸著の「夫婦の構造」という本のページをめくって見ると、第一番目のページに「何でも金で買える良き時代だが、夫婦の良き味わいだけは、金では買えない。それは宿命的に對立する二人がゆえに仲よくこねて作り上げるものだ」と書いてあります。そして、男と女は宿命というものの深い認識の上に立つて夫婦の関係というものもを考えて行かなくてはならない。

実際には情性で同棲を続けているだけで、夫婦としては何ら新しい喜びも見出せず、危機にもさらされず、千篇一律の生活を送っている夫婦も決して少なくない。

「どうせ人生は一回限りだ。この一回限りの人生になんらかの意味があるとすれば、それはただ一つ。一生を通じて同棲した男と女が、二人にとって不滅の作品を描く」ということよりほかにはないだろう」と著者は云つておられます。

没食子、カネ女という二人の男女は不滅の作品を描き上げた。これが今日の句集、「夫

婦」であります。お二人がお春秋に富んで居ります。これからも続いて不滅の作品をどんどん生み出して下さい。

数ある佳句の中から一句ずつ私が選ぶとすれば、カネ女さんのは

一生の不覚主人は飲んだくれ

没食子さんのは

苦勞とは思いませんと縫う妻よ

没食子氏は「夫婦」の披講まえに謝辞をのべられた。

「おかげ様で句集は好評でした。これはみなさまのご協力によるもので感謝申しあげております。生々庵先生には序文をいただき、小石奥さまには題字を書いていただきました。序文では身に余まるお言葉をいただき恐縮しております。

また編集いつさい、編集部不二田一三夫氏にお願いしました。なにからなまでに一三夫氏によりかかってしまいました。

それから常任理事有志ほかの方々から、記念品購入費とお心のこもったお祝いをいただき厚くお礼申し上げます。

どなたも感じられたことと思うが、明治、大正、昭和へと長い人生を歩んでこられた人の床しさはなんとも云えぬ味がある。昨今のようなきスギスとした野心と欺瞞の面はどこにも見られない。カネ女奥さんも良い方である。小石女史は、カネ女さんが出席するなら敬意を表してわたしも出席しようと思つておられた。

「傘」の選者、潮花氏は「川雉」時代に、「夫婦善哉」という特集があつて、没食子・カネ女ご夫妻を取材したことや、カネ女さんが「川雉・婦人友の会」で霞乃先生に師事しておられたこと、潮花氏が幹事だった関係でおなじみだった。

「針」の選者、大坂形水氏は、没食子氏が応召されたとき、色紙へ寄せ書きされた(句集に出ていない)一人であつた。いま生存している人は数氏よりいない。

「薬」の選者、菊沢小松園氏は、かつて本田溪花坊氏に師事されていたころ、没食子氏や故白柳氏は同じ釜のめしを食つておられた。このように選者諸氏は没食子氏とは深い関係のある方々ばかりである。

金婚記念の「生々楽天」につづいて、「夫婦」を刊行されたお二人。しかもご夫妻共著の先輩から、序文と題字を書いていただくなど、美しいドラマである。

今日ご出席の森下愛論氏は、「烏ヶ辻川柳会」のメンバーである。句集「夫婦」の配本などにお手伝いされたそうで、没食子氏は大変よろこんでおられた。

句集刊行記念句会と同時に句集が売り切れるという絵に描いたように理想的な形になったことはなんともありがたいことである。おめでとうございます。

この佳い月の、月間賞杯は阿萬萬的氏にかがやいた。

(ペン・不二田一三夫)
(司会・西田柳宏子―記録・高杉鬼遊)

出席―与呂志・摩太郎・敏・天笑・雅風・一三夫・文秋・弘生・没食子・カネ女・久介・信行・薫風・滋雀・小路・瓢太・水客・古方・勝美・潮花・捨吉・喜風・愛論・太茂津・きみ・千代三・美乙女・右近・規不風・桐下・エイ・翠光・千万子・綾よ・吐・英子・吸江・形水・萬の・小雅子・としや・栗・恭太・信治・清人・柳伸・善紫・花村・史好・あいき・英壬子・憲祐・久・以兆・涼一・三十四・恒明・千寿子・たつお・弥生・洋敏・史呂・幸太郎・一三・生々庵・小石・度・頂留子・みずは・芳川・正剛・岳人・雀踊子・小松園・庸佑・鬼遊・酔々・鎮彦・凡九郎・葉子。

席題「これから」 西村芳川選

これからのとき妻がそばにいる 一三夫
これからは練炭を買う策をねる 涼一
これからは妻が握っている余生 吐来
これからは決つてよくなる妥協案 史呂
これからは自力でやるというはんこ 天笑
これからは余生を綴るペラの赤 小雅子
これからの言のに何で死にはった 鬼遊
これからのくらし血圧気にかかり 小松園
これからの坂がけわしい白い地図 酔々
これからの設計図ひくハネムーン 庸佑
これからの男と女すぐ別れ 岳人
これからの二人に嬉しい虹の橋 英子
楽しみはこれからという古稀若し 恭太
たこ梅を出てこれからの妻揚子 小路
これからの二人黙つて満ち足りる 吸江

これからは生きる喪服の薄化粧
 これからは年にはふれぬ坂上る
 これからのプランに迷う戎はし
 緊張をすこれからが本舞台
 これからは私に還る夜の顔
 これからと言う顔男持っている
 これからはひとりで生きる家裁出る
 これからと言う人でした喪に昏れる
 これからをまだまだ生き抜く古稀の顔
 これからが勝負九回裏に賭け
 これからも私は私の顔でゆく
 これからの自分をお慕へ聴きにゆく
 振り向けば皆これからの目が光る
 猿知恵のこれから受話器とるところ
 これからは素面の時に来いと言う
 これからのことで親戚もめてくる
 これからは自信がついた車椅子
 これからの夫婦へ明るい句会の灯

滋 雀
 弥 生
 たつお
 桐 下
 潮 花
 滋 雀
 雀 踊 子
 信 治
 君 子
 あい き
 たつお
 としよ
 桐 下
 太 茂 津
 水 客
 潮 花
 文 秋
 吸 江
 芳 川

謝題「夫婦」 市場 没食子 選

バイブルを信じて愚痴のない夫婦
 錆ついて別れも出来ぬ老夫婦
 金婚の二人三脚まだ確か
 妻值りたる間夫の照れくさし
 満ち足りた寝息夫婦に明日がある
 再婚の夫婦の地味な借り衣裳
 喝采もあり妥協もして夫婦
 振り向けば何時でも妻がいて呉れる
 しようむないことに力きんでみる夫婦
 蚤の夫婦に不合理な夫婦箸
 夫婦して暮色に祈る夢がある
 蒸発もせず夫婦で鈍行で
 夫婦してきすい家に孫曹孫
 夫婦には夫婦の味のにぎりめし
 味噌汁の味淡々と老夫婦
 子が巣立ち元の二人になる夫婦
 どちらかが病めば夫婦だと思つ
 旅先で踊る阿呆になる夫婦
 ひな壇に雪洞淡し夫婦雛
 カカア天下宣言仲の良い夫婦
 関白宣言従う妻が居てくれる
 枯れて枯れて人間同士という夫婦
 金婚の謝辞へ入れ歯がちとゆるみ
 夫婦の看板背中につけているピエロ
 子等みんな巣立つてもとの差向い
 共稼ぎ夫婦希望を離さない
 二人三脚の紐がゆるんだてきた夫婦
 清濁併せのまのない夫婦にして返し
 家裁きょうもとの夫婦に牙え
 革新と保守で夫婦の筆が冴え
 別居して気のむくままに老夫婦

千代三
 千万子
 柳宏子
 与呂志
 一二三
 たつお
 小路
 水 客
 古 方
 文 秋
 滋 雀
 幸
 カネ女
 酔 々
 酔 々
 清 人
 雀 踊 子
 エ イ
 小 雅 子
 涼 一
 柳 宏 子
 英 王 子
 愛 論
 天 笑
 翠 光
 信 治
 吸 江
 摩 天 郎
 葉 子
 没 食 子

兼題「傘」 若柳潮花 選

落書き帳に二人で入る傘があり
 破れ傘電車の中へ捨ててくる
 雨ふれれば降ったで楽し迎え傘
 降って来るまでを気付かぬ置き忘れ
 顔かくす丁度傘あり恋がたき
 幾山河越えて傘寿の陽が昇る
 ピカピカの一年生の傘の色
 折りたたみ傘で色気のない別れ
 絵日切る善意の傘も底をつく
 給日傘が逆さに写るあやめ池
 着く迄はいらぬ傘やから畳む
 一本は提げて相合傘で行く
 逢ってきた火照りを傘にたたみ込む
 骨折れた傘借りて来たあほらしさ
 蛇の目傘春の愁いを畳みけり
 借り傘を開けばパチンコ玉が落ち
 寒い駅母が手を振る迎え傘
 傘の雪落すに惜しいあやめ池
 傘の名で呼ばれ丹前飲んでゆき
 旅情絵にしたい処に蛇目傘
 保険証と傘は忘れぬひとり旅
 ぬすつとの傘がいばつてゐる舞台
 背信の傘に淋しい雨が降る
 顔隠すしうろめたさの傘になる
 閉場どきの雨へ傘屋の抜け目なし
 傘の柄にへソくりして見破られ
 送り出す傘で肩先ぬらされる
 蛇の目傘絵になり雨に音がない

天 笑
 ♀ 女
 静 馬
 美 乙 女
 翠 光
 千 万 子
 美 乙 女
 涼 一
 幸 太 郎
 柳 伸
 以 兆
 庸 佑
 古 方
 君 子
 英 子
 史 好
 小 路
 としよ
 エ イ
 千 代 三
 柳 宏 子
 吸 江
 恭 太
 桐 下
 滋 雀
 一 三 夫
 柳 選
 紫 香
 千 万 子

国寶の蛇の目が古都の雨にぬれ
雨の日は傘のおしゃれがある女
傘持って帰つたぞと酔うてはる
わが道を行く男の傘が重くなる
母かばう傘の広さへぬれける
夕立の虹を見て去ぬ迎い傘

兼題「針」

大坂形水選

友禪の一針ごとに新春が来る
針供養すんで女は旅に出る
針山が愚痴こぼしそう錆びたまま
釜崎男に針を持たす雨
糸しく音へ縫針生きてくる
針持てばやつぱりおふくろさんやつた
針山に母のうらみが貯めてある
針の糸通らぬ齡を笑い合い
頂門の一針に小の虫生きる
針仕事小さい夢を抱き続け
飲んだ針やがて伴せ生んで来る
点滴の針が見つめている生命
就職は結婚までの待針か
針と糸バックに女がもつ鬚り
注射針持つからコドモにきらわれる
秒針のリズムに今が消えてゆく
退屈な女で針は錆びたまま
針のメド動くな眼鏡うるたえる
針穴がばちばち逆うらとなり
針箱に母の残したわらべ唄
針含む美人の口が裂けて来る
貴針女の業を思い知る
言い勝つて針をかくさぬ蜂になる

たつお 憲 祐 小 路 水 客 雀 踊 子 潮 花 栗 葉 醉 々 小 路 千 万 子 度 小 路 弘 生 吐 来 規 不 風 度 吸 江 小 雅 子 一 三 夫 滋 雀 愛 論 敏 小 雅 子 醉 々 み ず ほ 史 好 水 客

絹針を持つと聞えるお水取り
甚平縫う針子守唄聞き乍ら
まち針が狂つて花の図にならぬ
蜂ですら自衛のための針を持ち
まんまるいこんにやく刺さる針
毛糸針串さしのまま冬を病み
待ち針は女の思慕の一里塚
針の跡からたぐり出す密輪網
安らぎの場所をとうふに針供養
針山に燃える糸なき尼の寺
一本の針千人の敵つてくる
女のため息で縫針錆びてくる
待ち針を女心になぞらえる
没落を語るらぬ妻の木綿針
仮縫の針へ男は静かなり
嘘吐かす針は一本あればいい
まつり目を表に見せぬプロの針

兼題「薬」

菊沢小松園選

百薬の長とは別にのむ薬
薬より医者の一言効いてくる
カラフルな薬に人間試される
いつ死んでもよいのが欠かさぬ保健薬
アホにつける薬のアホが先に消え
薬など知らぬ夫婦の国説り
道修町薬を飲まぬまま勤め
スモンから薬がいやになりました
長生きをすする羽目となり
結局は薬に頼る羽目となり
悪名であつても利いた陀羅仁助
アデランス毛生え薬はあきらめる
医者者の飲む薬を呉れと動かない

岳 人 岳 幸 曲 ん 手 静 馬 愛 論 天 笑 右 近 文 秋 憲 祐 小 松 園 天 笑 薰 風 桐 下 涼 一 史 好 形 水 白 李 優 幸 静 馬 弘 生 芳 川 千 代 三 き み 水 客 史 呂 千 代 三 涼 一 規 不 風

日薬をさす暗がりの占師
副作用だけは確かに効く薬
飲んで良い薬以外は捨てて来る
薬屋のあとに薬大おちてくる
無医村の軒に薬草ぶら下り
漢方がぼつぼつ効いた爪の色
児に飲まず薬に祈りこめてある
利くさかい薬がちよつと怖うなつた
酒うましわたしは薬と思つてる
長生きをせよと苦い薬くれ
命は心配ないと薬たんとくれ
療養の薬園がゆい日を重ね
年輪がこんな薬になる話
食へ放題の旅へ胃薬持つて出る
糖分と色が奇麗な小児薬
赤黄青薬は色で飲まされる
お隣りも同じ薬のバスツアー
薬瓶抱いて睨みをまだ利かせ
鶴を折る手で正確にきすり盛る
更年期薬局真面目にきり盛る
生活の匂いに遠く薬のむ
雪深い国漢方薬がおいてある
森繁が飲むと如何にも効きそうで
気休めの薬をじつと千羽鶴
漢薬の方が根負けして治し
コマーシャル程効いたらなあと胃が思い
若い妻持つて薬に頼りきる
秘書がいて薬きちんと服まされる
ゲンショウコが持薬で關志まだ捨てず
薬剤師自分は薬のんでいす

鬼 遊 鬼 遊 洋 敏 庸 佑 雀 踊 子 憲 祐 一 二 三 古 方 吸 江 敏 三 十 四 信 治 小 路 萬 路 花 村 滋 雀 恭 太 吐 来 君 子 栗 水 客 芳 川 涼 一 信 治 文 秋 小 路 一 三 夫 史 好 萬 路 小 松 園 (河井庸佑・整理)



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に。下三マスに雅号。

菜の花句会

高杉 鬼遊報

欲がらみどつちもどつちと云う話
四苦八苦しる姿は子に見せず
それからの話は小言になる女
勤のよい女をめとらないように
何もかも云うてしもうた気の軽さ
水引きに作った話が入れてある
ちと太目と聞いていた見合い
お天気がいいねスパイの立話
吹き替への映画ギャバンも日本語
良い話いくつが続く梅見月
パンタロン太い脚でも細く見せ
慰謝料を真面目に払う四苦八苦
立春の余寒へ話長くなる
椿落ち俄かに勤がさわぎだす
極楽のはなし眠たい顔がより
ホステスの話は本当も嘘になり
トラさんになったつもりで映画出る
檜山の話鴉を点景に
青い実が映画に酔って熟れ初め
もつとひとひ話を妻にしてきかす

頂留子 柳童子 雀度 弥生 凡九郎 鬼遊 みずほ 紀美代 万里 糸葉 鎮彦 夕花 小松園 綾女 美幸 醉々 秋美 栗

いずも川柳会

板垣

雪に耐え陽を恋う竹の跳ね返り
ただ堪えて能面となる化粧する
その怒り堪えるひざがしらが笑う
受け流すことも覚えどみかんむく
台所明るくはすむ祝いごと
午後三時つまみ食いする台所
近所にも小さなスパイ笑ってる
娘の部屋をスパイみたいに探ぐる日も
お茶飲み隣のスパイおぼあちゃん
下座からスパイの資料で押し来る
ミサイルの射程に在って国を売る
引き汐を知らぬ小魚砂に跳ね
車椅子いつかは跳ねる夢を持つ
ぎりぎりに堪えてる脛と子は知らず
堪え抜いた泪ひとりになってから
台所嫁に渡して淋しがり
一と息を入れて客待つ台所
みかん色雪の白さに夢もたす
みかんの皮むきつつ妻の黙秘権
川柳わかやま 堀端
人間を笑う④のゴムの判
販売機人はますます見捨てられ
少年のマフラー向い風が好き
素晴らしい話術ひとつの資産です
聞き上手話の糸口ボンと呉れ
血の通う対話へひとみ生きてくる
はずんで隣の話の聞く一人
話題持つぬ世代の違いに風抜ける
部屋いっぱいいますます趣味の手を広げ
秒針がますます夜を長くする

草丘報 多賀子 正子 早苗 青湖 夢醉 シマヨ 明朗 文子 正江 河南 寿美子 幸一 美浪 代仕男 湖楽 峰雪 三和 はじめ 三男報 凡九郎 幸 善太 白光子 誠一 寿一 寿博 寿美数 天彦 式

④印押したばかりに喋られる
本場の④は社長の胸にある
④ねらう平和の中にあるいくさ
締め切った襖が聴いてる良い話
ガス電気ますます赤くなる家計
銭のない奴ほど話大さ過ぎ
横文字を駆使する話に欠伸する
覗く程ますます母に似る鏡
裏返せばなんにもなかった④
喝采へますますはしゃぐピエロです

どんぐり川柳会

谷垣 史好報

快調ですと主治医の方がうれしそう
快調な石を見てはる百度石
快調の笑顔と写す大腸杯
快調へ四季折々の風が吹き
ひげ剃った日へ大げさな見難い来る
快調なりズムで晴着縫うている
快調の足下にある落し穴
滑り出し快調 後半負けがこみ
快調な胎動らしいいりリズム
快調な男の自我が気に入らぬ
快調な便通 男盛りなり
快調に廻れ地球よ秒針よ
公私とも快調 顔につやがある
川柳たけはら 森井 善居報
去りがたし墓碑はなんにもおっしやらす
丸木橋さささささささささささささ
倅せな雪でおんなの掌に融ける
はぐれ鳩夕陽の中へ消えてゆけ
責任の重さ日に日に子は太り

太茂津 光代 雀踊子 裕美 頼次 佐代子 孝 佳南子 武雄 吸江 醉々 岳人 憲祐 勝美 弥生 好郎 瓢太 千代三 鎮彦 薰風 東天紅 史好 静水 房子 洋之祐 蘭幸 鈍舟

乳母車買つてこの子と春を待つ
亡父の齡を母の歩中に沿う暮参
ラララン春待つ花の芽がのぞく
一本の糸でステキなカーティガン
みな言つてしまつて負けだと思つ
だあれにも渡せぬカギを一つ持ち
職かえて見てもせわしいペンだこよ
十字架を背負ひ一年また一年
妻不在ゆきひら一つさがし出す
子の巢立ち母の乳房がひからびる
気まぐれな彩は持たない冬の花
死んだ気になればの雫が折れ曲る
雪匂う山の友から来た便り
美しい話へお恥ずかしい私
マネキンの器量とちがう人に売れ
なつかしい練炭火鉢の湯がたぎる

東大阪川柳同好会

寛子 不朽 靖子 中一愛 善居 節夫 鬼焼 笑子 ゆたか 英詩 一路 かつこ 敬子 貞子 かつ子 秀夫 綾女 三十四 滋啓 涼一 千代子 慶三 久三 誓二 かずを 信治 勝美 鎮彦 喜風

大根が煮えるお寺も京の冬
豪勢な外車油をくいすぎる
豪勢な邸二人で持てあまし
はみだしてから三猿の心知る
豪勢な膳に祝い箸がある
うみなり川柳会 岸本 無人報

後を追う目印誰かに奪われた
目印は目立たぬように裏につけ
目印になるほど黒子大きすぎ
目印のタバコ屋がないビルが建ち
もつぐに芽ぶく目印夫が掘り
大鳥居いくさを嫌う貌で立ち
はぐれた子鳥居の下で待つてみる
七五三記念に鳥居入れて撮り
鯛焼を買う間鳥居で待たされる
梅干も妙薬となる母の風邪
年越の風邪ですなどと持ちこまれ
副作用おそれ家伝の風邪ぐすり
カンニングする常連とウマが合い
カンニングした合格が祝われる
カンニングしたとは知らぬ答案紙
限られた命へ今日がもう暮れる
早春の陽のぬくもりがまぶしすぎ
切り捨てた政治へ泣き泣き青田荷る
川柳塔まつえ川合 恒松 町紅苗

湖風 喜一郎 良京 柳宏子 雀踊子 無人報 昌三 舟宏 吟月 熊生 日満 葉士人 行子 無人 華子 雄人 芳人 布堂 希満子 盛桜 富美湖 洋々 早紅 虎秋 寿美子 耕草 鶴丸 舞吉

妻の留守卯いちばんよく使い
筆ペンをきらつて明治道を摩り
毛筆の眼に筆ペンは邪道めき
風邪気味に妻は気転の卵酒
白梅のほのかに匂う月あかり
筆ペンの字だと思つ墨の色
モヤシツ子卵の殻ももろくなり
岸和田川柳会 植山 武助報

法善寺水かけ不動も凍りそう
自分より早く死ぬなと老夫婦
ひまがないないといつと逃げてる暇
ひまがないといつと相手になつて
ひまつぶしに始めた趣味にとりつかれ
持て余すひまを寒さが邪魔をする
ひとときのひまを小鳥が相手する
ひまひまに縫うて生れる日に備え
親のない里はだんだん他人めき
他人様を拝み倒して借るお金
他人ではいられない程恋が燃え
うれしさを素直に出せぬ他人の目
焼け跡へ他人の口がうるさすぎ
神様の視野には他人なぞない
人情の厚さ他人でない長屋
オエスケー川柳会 大坂 形水報

湖と林へ空気のように佇つ
年末を案じる里の荷が届く
幼な子が落語一席捧手して
落語家の栄光過去を語らな
幻覚の湖面に人形が透いて見え
末っ子の意見でジョギング始めだし
ゆつくりと落語聞くのもお正月

孤呂二 登美也 鉄花人 みのる 愚童 暹児 町紅 武助報 波津 世界人 民治郎 辰雄 春栄 武助 富志子 こう 加仙 佳志 希久生 白光子 ひで 操子 形水報 亜成 百合子 まさえ 聖地 千夢 一扇

落語家を殺す大きな欠伸する
 湖の冬にボートが欠伸する
 吹く風に燃える事なく散る紅葉
 暖冬に彼岸桜の狂い咲き
 落語家が政治家よりもてる国
 食べぬ子に母の気持ちの星人参
 不景気になるほど星が澄んで見え
 キャンパスに湖遊はず画家の筆
 星空へ明日の夢を投げてみる
 詩人だけ覗きに來てる冬の湖
 天扶羅にしても紅葉は炎えている
 行く末はどうであらう火種抱く
 ハタキかけると造化見事に蘇きかえる
 テレビずれした落語家に親しめず
 真打になつても米朝容赦せず
 駒つなぎ會(大阪市) 里 小路報

野生 重也子 安竹 形水 光男 哲行 雅洋 博泉 一度 一念 弥生 形水 入仙 好郎 恒明 柳岸 恭太 宏子 柳宏子 千代三 翠公 醉々 桐下 柳園 育園 茂子 善紫 規不風 英比古

本腰に構えて奥の目が光る
 本腰のやる気が男の顔にする
 どたん場でやっぱり本腰消えていた
 本腰になれない夜の眉を引く
 本腰になると女は距離を開け
 川柳高知 川竹 松風報 小松園
 職場ではきびしい父も孫に負け
 国境の寒波乗り切る渡り鳥
 不揃いの編目欲求不満かも
 三ヶ日厨にもなる酢の匂い
 寒波など知らない国に湧く石油
 神様の答へのほしいお賽銭
 音たてて寄せる寒波の桐一葉
 両方を立てた答が気に入らず
 和歌山七面會 中筋 三幸報 周穂
 また一つ加える馬鈴餅を焼く
 ラブシーンいつも途中でコマシヤル
 途中から話を変えろ勇氣ない
 風花や保母のこ言は保母の知恵
 やき餅の膝には猫も寄りつかず
 知恵熱とすました声で手をあてる
 朗々と吟ずる途中詩を忘れ
 入浴の途中と言えぬTEL長く
 結局は他人勝手な知恵をくれ
 演説の途中涙でもの言えず
 数読んだ積りが足らぬ雑煮餅
 何によりも女房の餅肌自慢にし
 知恵の輪が解けて明日へ切符買う
 年男女の声に餅を投げ
 知恵の輪を子から取上げ親夢中
 三歳の知恵に驚いていて平和

みずほ 雀踊子 美代 小路 小松園 松風報 一步 長坊 菊野 節子 克子 麗子 登舟 松風 周穂 隆恵 朱三子 智水庵 啓子 晃 ひろむ フクヨ 光治 勇次 文厚 寿子 二咲子 宣子 淳子

青い目がきれいに食べる桜餅
 集金の途中で車当てられる
 途中から話の輪に入り無視される
 途中まできたのと言う嘘があり
 川柳化粧(姫路市) 植村寄遊子報
 ふとん干す日向を猫も知っている
 出世せぬ男で一言多過ぎる
 鼻唄が出るご機嫌をとがめられ
 休日の僕をテレビが放さない
 欲望は棄てず善人時期を待つ
 寝ては起き起きては寝てる母でよし
 序ノ口に母は涙を見せず去に
 柏手の音こだまする除夜の森
 メニューみな読んでカレーを頼んでる
 憎む気になれず駄法螺を聞いてやる
 買状書く年に一度の墨を磨る
 品子 秀雄 隆史 三幸 紅月 秋月 岳詩 葉香 奮水 実男 越山 永楽 大鷹 秋峯 きよる

佳句地10選 (前月号から)

松川杜的選

産声と同時に期待背負わされ
 欲捨てた顔で出てくる寺参り
 僧兵の血が騒ぎ出す本願寺
 泣く時も少年の目は空を見る
 血縁の絆三猿にはなれず
 老人の素直になつたを不安がり
 喜んで貰える反則だつてある
 本当の顔を鏡の外におく
 真ん中に当ると二の矢が番えない
 十二月の京都の良さを知りはじめ
 テル 富子 勇太 登紀夫 紀美女 一ひで 松風 弘生 薫風

年寄の冷水ジョギング等をはじめ

川柳大阪

西岡

客遊子
洛醉報

足かせもとれ爽やかな余白ゆく
暖かい冬でみの虫寝つかれず
シヤンボ機は白蓮託正空の旅
省エネへ天もお力貸す陽気
カンカンの歳になりそろう猿が妬げ
人生の誇り綺麗な影残す
京の秋燃えたら妻はじつとせず
老いの背をどうして押すの冬の風
迎合も妥協もしない老一人
一夫一婦ふと人間にある疑問
高うてもやっぱり灯油の要る師走
故郷の味もどいて今師走
無職でも師走はのんびりして居れず
初日の出寒さこらえて夫妻岩
あぐらかく鼻がゆたかな人にする
一十一は二でない人生論
岩と若保津川下り岩を漕ぐ
お答えをします汚職に関知せず

南海電鉄川柳柳柳(大阪市) 辻

圭水報

もと栓を忘れ気になる白所
後始末任せるだけの顔でなし
後始末社長はとうに雲がくれ
やりくりの後始末ですボーナス日
みな食べて飲んで母さん頼みます
姉女房だまっています 後始末
リユーマチの妻へ言ううい後始末
息子の不始末親が涙の後始末
後始末目をそむきたい事故現場

美乙女
白梅
柳伸
雅風
千代三
宏子
圭水
泉秋
摩天郎
後始末

さようならと言わずに行つた後始末
後始末幹事にさせてみんな去に
後始末他人に頼んで気に懸り
借金の後始末せず死出の旅
後始末してたらライター落ちている
社長にも幅あるだけの日本地図
もっ少し幅幅はすいの量あり
札束をまいて男は幅きかす
人柄に幅が出て来た新社長
ゼロ地帯雪駄の音が幅きかす
どうしても追い越し出来ぬ年の幅

南大阪川柳会

中川

滋雀報

当然の結果意外に見えるだけ
神様に意外な出来事なんてない
定刻に帰れば今日はどうしたの
身の内を走る朝の水を飲む
急いでも美女の誇りで走れない
つつ走れ憂いが汗になって散る
女ひとり生きぬく嘘に隙がない
雪景色この世に嘘がないような
方便の嘘にも小人口ごもり
暖かい嘘に傷心つまるる
ボーナスのゆとりですし血積み上げる
灰皿に妻の小言がつきまとい
アメリカで皿も洗った立志伝
決心がこたつたのぬくみに溶けてくる
棒立てて倒れた方へ行く決心
先輩の先輩が来てけりがつき
あの世からけりを見守る遺書一つ
けりつけに来た作業衣はうす汚れ

千万里
誓二
勝美
登志子
与一
川狂子
ミツエ
維久子
綾久子
柳選
正流
柳宏子
静度
君子
憲祐
あいき
滋雀
智子
頂留子
弘生
久子
文秋
千代三
英子
白兎
小雅子
勝美
鎮彦

走らないパパの重みがわかりかけ
川口
弘生報

柳伸

城北川柳会

川口

さよならの片手は母の瞳に残り
片方の手だけ戦争まだつづき
片手でも結構 役に立つ軍手
凡人を動かす片手天を指し
片手で出せる仕事に誇り持つ
若夫婦ままごころらしい片手鍋
信号を渡る園児は片手あげ
片手間に造る人形をプロにされ
団交の片手の拳威勢よし
ルノール裸婦の片手にある恥らしい
ペンタゴの片手に妻子ぶらさがり
片手鍋器用に片手で用を足し
洗濯機片手間に読むラブレター
大物の片手は夢のよくな額
御老体保険で病氣保証され
苦笑い満期になった保険金
保険金持つて亡夫の愛に泣く
妻若く保険の額が気にかかり
保険証書もうすぐ満期へ出してみる

鬼遊
道子
満津子
右近
ますみ
きくみ
秀村
喜洗
星斗
弘
ふみ
炬斉
テルミ
喜代子
三十四
午郎
千子
美恵
茂樹

川柳後合(岡山県) 井上柳五郎報

猿付け銭に猿て芸を見せ
餌付けされ猿も野性をふと忘れ
日溜りをさがして親子の乳母車
立話して乳母車腹が減り
夕陽背に老婆があやす乳母車
乳母車で揺れた野道がある故郷
子に賭ける夢を乗せてる乳母車
失言の波紋は向う岸に着き
失言を避けて原稿丸読みし

柳五郎
博友
久米雄
佐加恵
哲郎
秋月
照路
梁太

失言をうやむやにせぬ速記録
失言を明治の男は取消さず
失言があつさり陳謝の二字に消え
増えるまで待つやろう妻のへそくり
へそくりを女握れば太くなる
へそくりを見逃していた妻の畏

川柳ささやま

吉日を喜ぶ母の目がさみし
五社詣り吉を手広う貰いすぎ
何気ない素振り二浪の吉報待つ
大吉を高々結ぶ日本髪
販売機おみくじ信じる気になれず
骨董屋家宝を抱いて眠くなり
初夢に今年は見たい宝船
公害の中で国宝ねむらされ
家宝などなくて我が家は平和なり
荒れた掌に宝は心と云い聞かせ
云わ猿になつて姑の座にすわり
定年で帰るふるさと猿が住み
猿知恵に及ばぬままの下り坂
叱られて芸した猿も背で帰る
かのを申負けそなりレータツチされ

虹柳俱樂部

新岡回天子報

胡風 正道 元一 恒洋 定平 草風
テ ル ひか平 孝 みのる 宗珠 百合子 老萩 越山 幸哉 ゆう也 とみ子 可住 ゆきお エキオ 与志
実 朴竜 勝一 久仁於 義美 仁部 掬治

病妻の笑顔を糧として生活し
八十年縁は異なるもの共白髪
にた川柳会
横道に外れた話しの方が受け
三味線を袋にしまふ手切金
かくれんぼした白魚に泣く漁民
消し壺の炭に似隠居部屋一人
原点に戻る日手の平じつと見る
こんこんと恩師の良心変わらない
地に返るささやくように雪の私語
嫁に座をゆすり老妻舟をこぎ
眼を閉じてもう一押しを待つ女
深酒の酩酊りをぬむらせず
親分はアツサリ切らせた話ッ腹
泥の舟漕いで運命確める
大仰に話す女の瞳の不信
勲章が欲しくて善人面をする
絵のような女が通る小糠雨
シクナルは赤粉雪のふりかかる
青竹のこころが大根うまいとこ
芸術にされて残った船細工
愛のことはに固い一線を引く

勝山双葉句会

お年玉息子夫婦でもめている
年金をぬくめて孫のお年玉
仏だんの亡夫へささやく灯を点し
眠い子にささやくよう子守唄
おせち煮る母のエプロンの色
初詣絵馬に託した子の願い
ささやいてみて老妻知らん顔
御自慢の竿に魚が寄りつかず

虹天 早苗

回天 早苗 虎秋 登美也 鉄花人 独仙 さまみえ 可保留 軒太楼 千草 静代 多賀子 夢酔 寿美子 三和 緑之助 早苗 キミエ 静世子 智慧子 千里 田鶴子 あいきの

寒くても逢える心は燃えている
よい姑になろうと思つちらしずし
神様のささやき聞きたい初詣
軒下の竿に捻りの秋を吊る

京都塔の会

結び目へいっそ鉄を入れようか
女ひとり嵯峨野は紅葉と話すところ
凧上げの正月を待つ休耕田
とげのない言葉で恩を着せられる
残照へ鶏頭の赤さよみがえる
スケッチブックにぐれて重く西の京
切札を持って疑惑に遠くいる
変な外人器用にさるそば食べてはる
ツッコラスめは日本語で愛想まき

市場没食子・市場カネ女共著
傘寿金婚「夫婦」
記念句集
おかげで売り切れました。あり
がとうございました
川柳塔社

久子 智子 節子 君子 杜の報 潮花 芳子 飛鳥 花代子 紫香 美穂 水客 萬的 求芽

白溪子 和友 杜的 弘三 佳丹子 明代

● 募 集 ●

六月号発表 (4月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選
 水煙抄 (10句) 菊沢 小松園 選
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)
 「むし歯」 斎藤 通風 選
 「オリンピック」 柳 楽鶴 丸 選
 「入梅」 田垣 方大 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

七月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選
 水煙抄 (10句) 菊沢 小松園 選
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)
 「物価高」 野呂 右近 選
 「御輿みこし」 小林 孤呂二 選
 「竹」 木山 遠二 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
 ★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

4月の常任理事会は3日5時から

定価 四百円 (送料29円)
 半年分 二千五百円 (送料共)
 一年分 四千八百円 (送料共)
 昭和五十五年三月二十五日印刷
 昭和五十五年四月一日発行

大阪府南区鰻谷中之町二〇番地
 編集兼 中島 蓬太郎
 発行人 藤原 童心 社
 印刷所 藤原 童心 社

〒542 大阪府南区鰻谷中之町二〇番地
 発行所 川柳塔社
 電話 大阪・二七一―三三九八番
 振替口座 大阪・三三三六八番
 普通預金口座番号・一〇二七七八三

本社四月句会

日時 四月七日(月) 午後六時
 会場 金風会館
 南区鰻谷東之町10番地
 地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
 電話 271-3935番

兼題 「天使」 「枝」 「箆かこ」 「反動」
 柳話 西尾 栗
 塩満 敏
 金井文秋 選
 阿萬萬的 選
 橘高薫風 選

席題 二題 当日発表
 各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
 大阪市南区鰻谷中之町20

川柳塔社

5月の兼題 「各駅停車箱」 「青謎」

ショッピング・ゾーン

梅田 一番地

楽しいショッピングと
 くらしめるの
 いこいをつくるの
 皆さまの
 百貨店です



大阪梅田・水電定休

阪神

電(06)346-1201(代)

・ペンペン草・

★ 雑詠選者交代

★毎年四月号から雑詠選者が交代する。「同人吟」は生々庵主幹「水煙抄」は菊沢小松園氏となる。選者が代わるとこれまで三句、四句組の人が上位に選出し、またはその逆になる人が出てくる。しかし気にするとはないと思う。選者の主観が変わっただけのこと、句者の作句力ダウンではない。「毎年何人かの方からいろんな質問を受ける

肉体疲労時のVB¹²補給に
アリナミンA

アリナミンA25の機能—肉体疲労時・病中病後・妊娠授乳期のビタミンB補給、神経痛・腰痛・筋内痛・肩こりの緩和、脚氣、宮説明書をよく読んで正しくお使いください。☆くわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。
武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27



が、先き様がどうであろうと自分の句を作っておればよいのではないかと。ペンに選者の好みの句に朝びたりして自分の個性を歪めてしまっただけで、それはそれで大変なことになる。「秀句鑑賞」の執筆者の中には、わざと下位から句を拾っていく人もいます。

友情

★正本水客、黒川紫香、若柳潮花三氏の友情は有名な、小学生時代から現在ま

▼葉子コーナ—

- ▼「短い命」に人出満開の桜の月。
- ▼人も浮かれれば、花も浮かれるかのようにあでやかに薄紅色の花びらをほころばせる。
- ▼芽吹いたばかりの若芽が日増しに目に見えて伸びます。まさに春本番。
- ▼三月から四月にかけて気温の変動も著しい。暗れ上がった夜には霜が降り、新芽に被害を与えたりするものこの頃の特徴のようです。
- ▼もう少し氣候が安定するまで私の作句ペースも安定しないようです。

で続いているのだからうらやましい限り。常任理事会でも句会でも水客、紫香、潮花氏といふように席順がきまっている。水客氏と紫香氏が40年生まれで潮花氏が41年生まれだったとおもいますが、生年月日の順かも知れない。三人の仲よしというのは珍らしいそう。

★「川雛」時代に山本葉光

「故人」といいう人がいて、葉光氏は小児マヒで寝たリ坐ったりの一生だった。番傘川柳本社の幹事長である磯野いさむ氏の若い頃をよ

く知っていると語っておられたから柳歴も相当に古い人だった。葉光氏は一川雛・阿倍野支部一に属していた。いまの「南大阪川柳会」の前身だが、故須藤豆秋氏と菊沢小松園氏が指導にあたっておられた。支部や本社の句会へ、葉光氏が出席する場合は、かならず故木村十悟氏が背負ってきたものである。ともに故人になっ

大阪・神戸・京都・宝塚を
最も便利に結ぶ

阪急電車

間満津子さんの友情からである。昨年の二賞発表句会で満津子さんが路郎賞準優秀作にかがやかれたが、目のおわりな満津子さんの句がわりになつていたので道子さんだった。受賞する時もそばにつききりだった。

★本年の「大萬川柳大会」

には道子さんも満津子さんにもベスト・テン入りを果たした。美しい友情はこのような形で開花したのである。心からの拍手をおくりたい。城北川柳会々長の川口弘生氏もさぞおよろこびのことであろう。

★島根の堀江正朗・芳子

夫婦も、友情のようなものを持ち、作句しておられるようにおもう。正朗氏が路郎賞、芳子さんが川柳塔賞とタイトルをご夫婦で貰った偉業は珍らしいことだ。夫婦・友情・ライバルさんだが、いつまでもご健勝をつづけていた。

★番傘さんとの選者交流の

友情。今年は岸本吟一主幹が七月の路郎忌に来てくださることにきまっています。

★五月からおめでたがつづ

き、うれしい悲鳴が待っている。(不三田一三夫)

昭和四十二年一月九日 第一種郵便物認可
昭和五十五年四月二日発行(毎月一日発行)
刊大正十三年 通巻六三五号

川柳塔

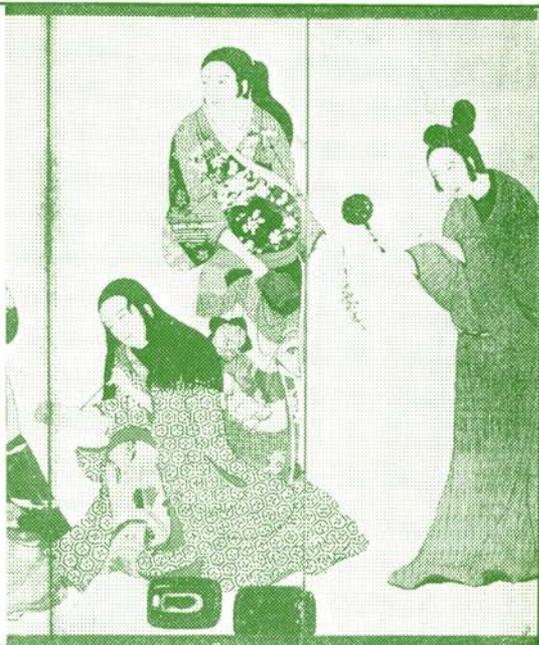
四月号

美の殿堂 大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
静かな環境にある大和文華館
は 日本建築の特色に近代美
を生かした美術の殿堂です
収蔵品も日本・中国を中心に
国宝・重要文化財を含む 有
数のコレクションです
観覧時間…10時～17時

▶近鉄奈良線 学園前駅すぐ

近鉄



菊正宗

料理がいきる
辛口の本格派

生酏辛口

きもとからくち



神戸・灘
菊正宗酒造株式会社

定価 四百円(送料二十九円)